

大阪経済大学ワーキングペーパー・シリーズ

**行き過ぎた有用性アプローチへの  
歴史からの警鐘**

Working Paper No.2012-1, April 2012

**渡邊 泉**

**大阪経済大学情報社会学部教授  
関西学院大学博士（商学）**

大阪経大学会

# 行き過ぎた有用性アプローチへの歴史からの警鐘

## 目次

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 1. はじめに                            | 2  |
| 2. 会計の本質－証拠性の担保としての取得原価－           | 3  |
| 3. 会計の計算構造を支える複式簿記の根源的役割           | 4  |
| 4. 時間軸の相違に過ぎない取得原価と時価              | 6  |
| 5. 有用性と信頼性の狭間                      | 8  |
| 6. 複式簿記生成当初における時価評価                | 9  |
| 7. 18 世紀までの固定資産の時価評価               | 11 |
| 8. 18 世紀における固定資産の評価方法              | 13 |
| 9. 棚卸資産に対する時価評価の登場                 | 17 |
| 10. 取引価格会計としての取得原価と市場価値, そして割引現在価値 | 19 |
| 11. 企業利益にとって実現概念の重要性               | 23 |
| 12. 信頼性, 検証可能性の後退と忠実な表現            | 26 |
| 13. むすびに代えて－会計の本来的役割－              | 28 |
| 参考文献                               | 31 |

【キーワード】 信頼性, 有用性, 検証可能性, 目的適合性, 忠実な表現, 時価評価, 公正価値, 市場価値, 実現主義, 証明手段, フロー, ストック, 包括利益, 当期純利益

## 【要約】

13 世紀初め, イタリア北方諸都市において, 債権債務の備忘録として発生した複式簿記は, 14 世紀前半に至り, 実地棚卸で求めた利益を証明する手段として完成した。すなわち, 会計の計算構造を支えてきた複式簿記は, 取引事実にもとづく証明手段をその根源的な役割として生成したのである。会計にとって最も重要なことは, そこで求められる利益が事実にもとづく, 誰によっても検証可能な信頼性を有していることにある。

しかしながら, 今日の意思決定有用性アプローチのもとでは, 有用性や目的適合性が過度に強調され, 会計の根源である事実にもとづく正確性や検証可能性に担保された信頼できる情報よりも, 有用と思われる情報がより重視されるに至った。一体, 信頼できる内容であるからこそ有用な情報であるはずなのに。

今日の結果のみを重視する資産負債アプローチのもとで求められる包括利益情報は, 将来キャッシュ・フローにもとづく不確実な予測が入り込み, 信頼を原点に置く会計に大きなノイズを混入させてきた。本稿の目的は, 複式簿記が生成した当初の役割を検証しながら, 今日の行き過ぎた有用性アプローチによる提供される会計本来の利益情報の質的転換に対して, 歴史の視点から警鐘を打ち鳴らすところにある。

## 1. はじめに

FASB によって展開された資産負債アプローチにもとづく会計観は、今まさに現代会計を席捲し、会計が 800 年もの長きにわたって継承してきた発生基準を基軸にした取得原価主義会計にコペルニクスの転換を突きつけたといつて過言ではない。

現代会計の最も基本的な役割は、情報提供機能にあるといわれている。しかしながら、近年、意思決定に有用な情報という側面が過度に強調されすぎたため、財務会計は、その本来の計算構造の枠組みを超えて、事実にもとづく結果の提示から乖離した、予測あるいは期待という禁断の実を口にしてしまったように思えてならない。なぜなら、投資家とりわけ投資ファンドに代表される投機家が要求する有用な情報は、過去の取引事実にもとづく信頼される情報よりも、たとえ不確実な要素を含んだものであったとしても、市場で推定できる将来の予測情報の方が意思決定により有用であるという傾向が強く支配していると思われるからである。

果たしてそうであろうか。FASB は、1997 年に包括利益の開示を義務付ける会計基準 SFAS 第 130 号を発表したが、「SFAS130 の構成要素である『その他の包括利益』は、単に包括利益にノイズを加えているに過ぎない<sup>1</sup>」という実証研究による指摘も同時になされているのは興味深い。本来、過去会計である財務会計に将来の予測を見込む管理会計的な現象が生じてきた結果<sup>2</sup>、財務会計の事実にもとづく検証可能性に裏打ちされた信頼性に大きな歪が出てきているといえよう。

継続的な記録を前提にして発生し、実地棚卸で求めた利益の証明手段として完成した複式簿記は、企業価値情報の提供を中心に据える今日の資産負債アプローチの会計観のもとでは、もはや不要の存在になったのであろうか。会計の計算構造を支えてきた複式簿記が 13 世紀の初めから今日に至るまでの 800 年の長きにわたり、脈々と継承されてきたのは、取引事実にもとづく正確で誰によっても検証可能性が担保された信頼できる利益計算システムであったからである。有用性や目的適合性という名のもとに、極論すれば継続的な記録を前提にしない資産負債アプローチによって、会計は、投資家や与信者たちに果たして真に有用な情報を提供することができるのであろうか。会計を誕生せしめた収益費用アプローチを片隅に追いやった公正価値会計は、それを会計の本質に照らし合わせて見たとき、果たして如何なる、そして如何ほどの理論的根拠を持ちうるのであろうか。

このワーキング・ペーパーでは、情報提供機能を第一義的とする現代会計の役割に照らし合わせながら、会計ならびにその損益計算構造を支えてきた複式簿記がいかなる役割を担って歴史の舞台に登場してきたのかを再吟味し、これを通して、会計の本質がどこにあるのかを再検討するところにある。会計の重心を信頼性から有用性に、あるいは検証可能性から目的適合性にシフトさせてきた現代会計が目指す方向性の危うさに歴史というフィルターを通して警鐘を打ち鳴らしたい。

---

<sup>1</sup> Dhaliwal, Dan, K.R.Subramanyam and Robert Trezevant [1999], p.47.

<sup>2</sup> 松本敏史 [2008], 57 頁。

## 2. 会計の本質―証拠性の担保として取得原価

AAAによると、会計は、「情報の利用者が判断や意思決定を行なうにあたって、事情に精通したうえでそれができるように、経済的情報を識別し、測定し、伝達する過程である<sup>3)</sup>」と定義されている。言うまでもなく、会計は、英語でアカウンティングと言われるように、その意味するところは、企業の1年間の営業活動の成果を利害関係者に説明する行為である。したがって、会計の役割は、一般に情報提供機能と利害調整機能の二つがあると言われているが、とりわけ財務会計の第1義的な機能は、外部の利害関係者に期首から期末までの1年間に企業が獲得した期間損益情報を投資家や与信者に提供するところにある。財務会計が外部報告会計ないしは過去会計と言われているゆえんである。決算時点から遡及して過去1年間に実現した配当可能な期間損益を算出し、それを利害関係者にディスクローズするのが財務会計の本来的な役割である。発生基準を基盤にして取得原価で測定された配当可能な実現利益を意思決定にとって有用な情報と位置づけていたのが、いわゆる伝統的な会計の枠組みであった。

しかしながら、意思決定に有用な情報という側面に力点を置いて考えるならば、これまでに獲得した利益の過去情報よりも、これからいくらの利益を獲得する見込みがあるのかという未来情報の方がより魅力的になってくる。多くの投資ファンドや一般の株主たちの要望に応えたアナリストといわれる人たちは、こぞって企業の将来の獲得利益の予測を行い、将来キャッシュ・イン・フローを推測することによって企業価値を判断し、その予測結果によって投資意思決定の決断に役立つ情報を提供しようとする。すなわち、投資ファンドやアナリストたちにとって、したがって彼らの予測を参考にする投資家とりわけ投機家にとって有用な情報は、過去1年間で獲得した配当可能な実現利益よりも公正価値によって測定された未実現利益をも含めた包括利益や株価総額を基準にして求められる企業価値情報がより魅力的になってきた。

会計ビッグバン以降の新しい会計観は、会計が利害関係者に提供する情報の中身を当期純利益から包括利益に、時として企業価値へとシフトさせてきた。もし会計の目的が企業価値を提供するのであれば、株価総額やフリー・キャッシュ・フローを基準にした計算構造のもとでは、もはや800年近くも会計の計算構造を支えてきた複式簿記は、不要になってしまう。なぜなら、企業価値計算には、必ずしも、継続的な記録が前提にされるわけではないからである。企業価値計算は、会計の枠組みを超えたいわばファイナンスの研究領域の問題である。もっとも、今日の複雑な現代社会においては、会計とファイナンスの境界を明確に線引きすることは、困難であり、そのことが反ってそれぞれの学問の本質を明らかにし、それぞれの現実の研究手法を練り上げていく上で、大きなマイナス要因になりうることもある。この点は、留意していなければならない。しかし、分析の過程で、隣接科学の境界線を混同してしまうと、それぞれの科学の本質を見誤ってしまう恐れがあるの

---

<sup>3)</sup> AAA [1966], p.1, 飯野訳 [1969], 2頁。

もまた避けがたい事実である。

いうまでもなく、伝統的会計のもとでは、そこで提供される意思決定に有用な情報というのは、取得原価をベースにした発生基準にもとづいて計算された当期純利益、すなわち配当可能な実現利益である。この実現利益は、継続的な記録、すなわち複式簿記によって、フローとストックの二つの側面から計算される。それがここに至り、投資意思決定にとって有用な情報は、単なる過去情報ではなく、たとえ予測を含んだ不確実な情報であったとしても、「これからどうなるのか」といった未来情報が重要であるという考え方が登場してくる。しかし、これから起こりうるであろう将来のあるべき方向を予測するいわば未来会計は、これまでの実績の積み重ねによって実現利益を算出してきた過去会計としての財務会計の枠組みからは、大きく逸脱してしまう。

ここに、虚偽や粉飾といった現代会計の陥りやすい大きな落とし穴が存在する。なぜなら、予測と実際に差異が生じた時、自らの予測を正当化させるために、実際を予測に近づけようとする意図が強く働くからである。粉飾ないしは逆粉飾という事実の改ざん行為である。将来の当てもの世界である予測情報に、もっともらしい説明や数字によってまやかしの客観性や正確性や信頼性を付与するために作り上げられたのが、まさに、将来キャッシュ・フローとか割引現在価値と言った得体の知れない数字なのである。このような数字がいくらディスクローズされたからといって、真に会計の透明性が確保されたということにはならない。

近年、有用性のために信頼性が足かせになってくると、意思決定に有用な財務報告の基本的な質的特性からこの信頼性や検証可能性を後退させ、忠実な表現という新たな概念を持ち出して、信頼性を後退させた大義を求めようとしている。この点について、第 11 節で述べる。

### 3. 会計の計算構造を支える複式簿記の根源的役割

発生当初の複式簿記は、損益計算ではなく債権債務の備忘録ないしはトラブルが生じたときの文書証拠、すなわち公正証書の役割を果たしてきた。人間の記憶には限界がある。そのため、後日のトラブルを回避する目的で記録されたのが、複式簿記である。万一、係争になった時、帳簿が裁判所に提出され、証拠書類として用いられた。複式簿記は、日々の取引を誰によっても検証可能な文書証拠として書き残すために記録されたのである。その証拠性を高めるために、したがって、公正証書と同様の役割を果たさせるため、16 世紀末ころまでの帳簿には、その冒頭に、十字架と共に「神の名において、アーメン」(Al Nome di Dio, Amen) という文言が記されていた。

文書証拠として記録された金額は、いうまでもなく、正確で信頼できる金額、すなわちいつでも、誰によっても直ちに検証されうる数字でなければならない。このすべての人から信頼される数字であるためには、まず、如何なる予断も入らない事実にもとづいた正確で客観的な金額であること、次いで、その金額がいつでも、誰によっても検証できる現実的な金額であることが要求される。すなわち、透明で検証可能な信頼できる金額であるこ

とが前提になる。一体、信頼できる数字であるがゆえにこそ、意思決定に際して有用な情報になるはずなのである。

会計の利益計算構造を支えてきた複式簿記は、その発生以来、かかる要求に応え得る測定手段として、現実取引した時点の価格、すなわち取引価格（時が経過すると取得原価）にその根拠を求めてきた。取引価格（＝取得原価）による測定の最大の利点は、そこで測定された価額が歴史的な事実として、その価額の客観性あるいは事実の検証をいつでも誰によっても可能にさせるところにある。ここにこそ複式簿記のレーゾンデートルがあり、会計に対する信頼性を確固たるものにした最大の要因が存する。最古の勘定記録から数えて今年が丁度 800 年にあたる。会計ないしは複式簿記が中世より今日に至るまでの長きにわたって継承されてきたのは、まさにこの事実性と検証可能性に裏づけられた正確性と透明性、すなわち信頼性が担保されていたからなのである<sup>4</sup>。われわれは、決してこの事実を忘れてはならない。

13 世紀の初めに複式簿記が発生するが、その発生当初では、まだ集合損益勘定が形成されていない。そのため、継続記録によって企業の総括的な損益を計算することができなかった<sup>5</sup>。しかしながら、たとえそのような状況下においても、フィレンツェの期間組合では、貴族社会のヴェネツィアの家族組合とは異なり、血族間での結社が否定されたため、血族に寄らない期間組合が結成されていた<sup>6</sup>。そのため、組合員相互間での利益分配の現実的な必要性に迫られ、必要に応じた時々非定期的に期間を区切って企業利益を計算した。先駆的期間損益計算である<sup>7</sup>。複式簿記の完成以前では、継続記録によって企業の総括的な損益を計算し、その総括利益にもとづいて各組合員に利益の分配が出来なかったため、当時の商人たちは、それに代わる方法を考案した。それが実地棚卸しを中心にしたビランチオ（利益処分結合財産目録）にもとづく損益計算である。

しかしながら、実地棚卸しによる結果の側面からの有高計算だけでは、そこで求められた利益の信頼性に共同出資者からの疑義が挟まれる懸念が生じてきた。たったこれだけの利益しか獲得できなかったのかと。そこで、経理担当者は、ビランチオで求めた利益に一切の誤りや不正がなかったことを信頼できる何らかの別の手段で検証する必要に迫られた。信頼できる検証方法、これが継続記録、すなわち複式簿記による損益計算である。こうして 13 世紀初頭に発生した複式簿記は、ビランチオの利益の正しさを証明する手段として遅くとも 14 世紀前半には完成を見ることになる。この信頼性、正確性、事実性、証拠性、検

---

<sup>4</sup> 会計における信頼性の原点は、その計算構造を支えている複式簿記が中世イタリアで完成する際、実地棚卸しによる有高計算を継続記録によって証明する道具として用いられたところに求められるが、この信頼性は、中世イギリスの普通法とそれを社会的な規範で補完する衡平法やそれを支える信託法理の考え方も同時に基盤となっているということもできる。この点については、石川 [2010]、226－228 頁、および千葉 [1991] 21-23 頁を参照。

<sup>5</sup> 渡邊 [2005]、47-8 頁。

<sup>6</sup> 斎藤 [2002b]、301-336 頁。

<sup>7</sup> 先駆的期間損益計算については、渡邊 [2005] 17-18 頁、および渡邊 [2008]、45-46、80、109 頁を参照。

証可能性あるいは透明性こそが複式簿記を誕生させた直接的な要因であり、これこそが複式簿記ひいては会計の根源的な立脚基盤なのである。

証明する側と証明される側と一体どちらが信頼に足るのか。いうまでもなく証明する側、すなわちピランチオの利益ではなく複式簿記による継続記録で求めた利益である。換言すれば、複式簿記による継続記録は、実地棚卸して実際に確認できる実在としての配当可能な実現利益を証明するための手段として完成したのである。いわば、「もの」の世界（現金や土地や建物といった取引の結果としての具体的事象）を「こと」の世界（現金や土地や建物を生み出した原因としての抽象的事象）で立証しようとしたところに<sup>8</sup>、複式簿記の本質があると言えよう。時まさに 14 世紀前半のことである

複式簿記が原因の側面からの抽象的な損益計算（「こと」の世界）によって結果の側面からの具体的な有高計算（「もの」世界）を証明する道具であったという一つの証左として、われわれは、17 世紀冒頭にライデンで出版されたシーマン・ステフィン（Simon Stevin : 1548-1620）の『数学的回想録』を挙げることができる。継続記録にもとづく費用・収益の変動差額計算で求めた利益は、有高計算の結果としての資産・負債・資本の増減比較計算によって求めた利益を証明する手段として用いられた。

彼は、元帳諸勘定の締切に際し、資産・負債・資本の一覧表としての状態表（Staet）を作成して期末の正味資本を算出している。この期末資本を期首のそれと比較して 1 年間の利益を算出しているのである。このストックの側面から求めた期間利益を証明するために、証明表（Staet Proef）としてフローの側面から計算された損益表（Winst en Verlies）を作成し、そこで求めた利益によって状態表で算出した利益を証明するという手法を説いている<sup>9</sup>。したがって、継続的な記録にもとづき損益表で求めた利益は、証明のために用いられる数値であるため、その利益は、誰によっても検証可能であるという透明性とその記録に対する絶対的な信頼が確保されていなければならない。では、この検証可能な透明性や事実にもとづく記録の信頼性は、如何なる状況をもって担保されていると言えるのであろうか。いうまでもなく、それは、事実にもとづく記録、すなわち取引が実際に行われた時点の価格、すなわち取得原価であるのはいうまでもない。

#### 4. 時間軸の相違に過ぎない取得原価と時価

取得原価というのは、取引時点の時価（取引価格＝市場価格）である。取引が実際に行われた時点の価格が時の経過した決算時点で過去の価値を示す取得原価に変様するに過ぎず、その実態に何らの相違もない。すなわち、取引が行われた時点の市場価格、すなわち時価と決算時点での価格、すなわち取得原価は、単に時間軸の落差によって生じる表象上の相違に過ぎず、市場価値は、本質的には取得原価と同質なものと位置づけることができ

---

<sup>8</sup> 木村 [1982]、第 1 部「こととしての時間」を参照。

<sup>9</sup> Stevin [1605], p.34-6, 岸 [1975], 138-40 頁。

る<sup>10</sup>。

一般的には、時価とは公正価値を指し、具体的には、現在の市場価値ないしは将来キャッシュ・フローの割引現在価値を指している。しかしながら、現在の価値と言ったときの現在という時間が果たして実在しているのであろうか。時間を過去、現在、未来という時系列で捉えたとき、現在はまさに瞬間の今であり、「したがって、本来的な『今』は、時間の部分ではなく、過去と未来を分割し、両者を区別するだけの『長さも幅もない点』である<sup>11</sup>」。したがって、時間は、現在と過去との関係論であり、未来は、「言葉のあらゆる意味で『ない』」のであり、それは、過去と現在に吸収されてしまう<sup>12</sup>ことになる。

だとすれば、将来キャッシュ・フローという実在しない未来という時間で測定された価額のどこにその実在性を求めればよいのであろうか。会計ならびにその利益計算構造を支える複式簿記は、正確性や検証可能性に裏打ちされた利益情報を提供することによってその信頼を勝ち取ってきた。実在する現在価値で評価する市場価値は別にしても、この信頼性をもっとも重視しなければならない会計的測定にとって、果たして実在しない未来という時間によって測定する得体の知れない将来キャッシュ・フローやその割引現在価値のどこにわれわれは、信頼を置くことができるのであろうか。

同じく公正価値といえども、市場価値と割引現在価値では本質的には次元を異にする価値である。時間の時系列で見ていくならば、現在という時間を一定の幅をもった帯として捉えるか瞬間の今として捉えるかによって違いは生じてくるが、いずれにせよ、「瞬間の今」という時間は、すぐに過去へと吸収されていく。すなわち、この「瞬間の今」における市場価値による評価額は、瞬きをした次の瞬間に過去、取得原価に変わってしまっているのである。換言すれば、市場価値は、現在を今としてとらえ、過去と未来との単なる接点として見ていく限り、取得原価と本質的には同じものになる。このように考えてみると、過去が「かつての現在」であるように<sup>13</sup>、取得原価は、「かつての市場価値」なのである。したがって、公正価値測定のうち市場価値（現在価値）による評価は、取得原価主義会計の枠組みの中に位置づけることが可能になる。市場価値測定会計は、修正取得原価主義会計と見なすことができるのである。すなわち、複式簿記は、その発生の当初から、時価会計と取得原価会計との併存会計であったといえる。

事実、18、19世紀イギリスの簿記書では、そのように位置づけてきているように思われる。しかしながら、割引現在価値（未来価値）は、それができない。なぜなら、未来は、そのままの形で現在に存在することがありえないからである。

すでに言い古されたことであるが、例えば市場性のある有価証券一つをとっても、そのマーケットでの市場価値は、一般に客観性があると思われているが、1万株や2万株の僅かな持ち株数であればともかく何百万株と言った巨額の株式をいつときに現金化するに際し

---

<sup>10</sup> 渡邊 [2010], 2-3 頁。

<sup>11</sup> 入不二基義 [2008], 21 頁。

<sup>12</sup> 中島道義 [2007], 194 頁。

<sup>13</sup> このような考え方は、時間における運動、すなわち「時間の流れ」の錯誤を明らかにした結果の産物である（大森荘蔵 [1996], 89-90 頁）。

ては、その市場価値は、頭の中で思っているほど実現可能な価額とはいえない。売り進めていく中で株価は下落し、当初の価額で全てを売り尽くすことはできない。そんな市場価値のどこに、実現可能で信頼できる根拠を求めることができるのであろうか。

いうまでもなく、会計記録は、経済事象の反映である。そのため、取引として認識された事象（仕訳）から元の姿（取引）に復元できる手法によって表現されているか否かが極めて重要になる。きまぐれな時価の変動によって企業利益そのものに目まぐるしい変動をきたすような情報のどこに、一体われわれは、信頼できる価値を見出せるというのであろうか。現代会計は、将来キャッシュ・イン・フローというばら色の期待でカモフラージュされた得体の知れない禁断の実を口にしてしまったのはなかろうか。

## 5. 有用性と信頼性の狭間

複式簿記がビランチオで求めた損益を集合損益勘定の損益で証明したという事実を考慮するとき、証明される数字（有高計算上の利益）と証明する数字（継続記録による利益）の間に、いわばクリーンサープラス関係が成立していなければ、証明行為自体に意味がなくなる。ストックの側面から資産負債アプローチにもとづいて求めた利益とフローの側面から収益費用アプローチによって算出した利益が一致した時に始めて、複式簿記が完成を見ることになる。会計の情報提供機能を過度に重視し、利用者のニーズに合った企業価値情報を提供するために、クリーンサープラス関係をも否定する貸借対照表偏重の昨今の会計観は、まさしく会計の本質を取り違えることになる。

情報の提供先が配当可能な実現利益情報を求める一般的な株主から瞬間瞬間の企業価値情報を求める<sup>スベキュレイター</sup>投機家<sup>投機家</sup>に変わってくると、その結果、会計の本来の機能である信頼性や検証可能性よりも有用性や目的適合性が強調され、伝達目的が測定目的を規制し、[認識→測定→伝達]という会計の本来の時間軸が[伝達→認識→測定]という逆転現象を生じさせてしまう<sup>14</sup>。今日、会計情報の有用性や目的適合性が強調され過ぎたため、会計を成立せしめた本来の機能である事実性や検証可能性に担保された信頼性が後退してしまったのである。もちろん、「情報の有用性は、期待される目的適合性と信頼性のバランスをどうとるのかにも依存する<sup>15</sup>」のであるが、一体、信用できる情報でなければ、有用な情報とは成り得ないはずであるのに。

現代の複雑な社会状況の中では、企業価値の変動に大きな影響を与えるのは、会計以外の情報、例えば政情不安や巨大な自然災害に伴う情報の方がむしろ大きい。われわれ会計に携わる者は、会計が意思決定に有用なすべての情報を提供できるという幻想に陥ってはならない。複式簿記は、投機家たちの意思決定に有用と思われる不確定な未来情報を提供するための道具ではない。重要なことは、提供される情報が事実裏付けられた誰からも信頼される情報であるか否かである。時として、信頼される情報であるがゆえに、意思決

---

<sup>14</sup> 井上 [2008], 3 頁。

<sup>15</sup> 斎藤 [2002a], 6 頁。

定に有用な情報にはなり得なかったとしてもである。

会計の利益情報の信頼性や透明性を確かなものとさせたのが、発生・実現基準を基軸に据えたストックとフローの二つの側面からの取引事実にもとづく損益計算であった。ストックで求めた利益情報とフローで求めた利益情報の非対称性は、まさに、この複式簿記を生成せしめた根源そのものを否定することになる。もし、この非対称性が認められるならば、現実に見ている知覚表象としての写像あるいは見えていると思っている想像表象としての写像は、そこから実像を復元することができず、それらの取引として写し出された経済行為は、単なる蜃気楼に過ぎないことになる。しかし、IFRS のいう忠実な表現という考え方は、かかる蜃気楼としての経済現象の忠実な表現ということになるのかもしれない。だとすれば、昨今の忠実な表現などという概念は、信頼性を担保する何の意味も持ちえない。原取引を復元できないような仕訳によって構成された会計情報は、利害関係者の判断を誤らせる結果に終わってしまうだけに過ぎず、決して意思決定にとっても有用な情報にはなりえないのである。

もし市場がかなりの厚みを持ちかつ容易に現金化できる状態ならば、市場価値も信頼できる尺度になるかも知れない。しかし、市場に不完全さが存在する限り、市場価格が資産の「真実かつ公正な」価値を表していないことがしばしば生じてくる。その他の包括利益などという市場のノイズによってかき乱された取引の写像としての記録は、極論すれば、意思決定に有用な情報どころか反って判断を誤らせてしまう有害な情報にもなりうるということを認識しなければならない。

意思決定に有用な情報は、予測や期待が多く混入される将来価値（公正価値）ではなく、原取引の追跡可能な測定価値、すなわち取引価格（取引時点の市場価値＝取得原価）こそが真に有用な情報なのである。われわれは、現在の真の価値を反映しているごく当然のように思われている時価ないしは公正価値といわれる価値の実態、あるいは本質をしっかりと見極めておく必要がある。

## 6. 複式簿記生成当初における時価評価

現存する最古の勘定記録は、1211 年フィレンツェの一銀行家がボローニアの定期市で記録した 2 葉 4 頁の上下連続式の勘定記録である。そこでは、僅か 4 頁の勘定記録のため、勘定科目によって貸倒損失勘定が設定されていたか否かを確認することはできない。しかしながら、貸付先が倒産等によって貸倒れになるであろうリスクを十分に認識していたであろうことは、記帳文言から容易に推測できる。すなわち、「サンタ・トゥリニタ出身のオルランディーノ・ガリガイオは、われわれがサン・ブロッコリーの定期市で彼に貸し付けたボローニア〔貨幣〕に対して、5 月半ばに 26 フィオリノ（リブラ）を返済しなければならない。もし支払いが遅れた時は、1 フィオリノ（リブラ）につき月 4 ディナリの利息を支払う。もし彼が支払えなくなったときは、ボローニアの製靴商アンジョリーノが支払いを約束した。証人：アヴァネージェ・ベジャカルツア商会。項目：彼は、ガレッティーの息子ミケーレから 43 ソルディを受け取る。われわれは、それらをスキリンクァ・マイネ

ッティの勘定から転記する<sup>16</sup>」と書かれている。すなわち、返済不能になったときの用心のため、貸付先より保証人を取っているのである。まさしく、貸付債権を時価で評価替えしようとしていたことを窺わせる記帳である。もし約定を遅延期限までに支払えなかった時は、20%の遅延金利を課した。この利率に対応する利息は、期待利益の喪失分と見なされ、当時の金融業における平均的な金利であったようである<sup>17</sup>。

実際に貸倒損失勘定を設定している記帳例として、われわれは、14世紀末のダティーニ商会バルセロナ支店の帳簿を挙げることができる<sup>18</sup>。この記帳例では、売掛金を時価で評価替えして、貸倒損失を「取り戻せない損失」(irrecoverable account)として計上している。また、1404年のダティーニ商会フィレンツェ支店では、掛売り代金のうち回収不能部分を不良債権(cattivo debitore)として計上している<sup>19</sup>。パチョーリの『スンマ』でも第3章「財産目録の模範形式」項目14において、「私は、[支払いが] 確実な債務者に対して、何ダカットの回収可能な貸金があるかを記載する。これに対して、[回収が] 確実でない債務者に対する債権を不良な貸金と呼ぶ<sup>20</sup>」と述べている。

当時の損益勘定は、資産・負債・資本勘定に転記される以外の私に属するすべての勘定が転記され、単に元帳諸勘定を締め切るための「寄せ集め」の集合勘定として設けられていたに過ぎなかったと言われている<sup>21</sup>。そのため、損益勘定によって企業の総括損益を計算するという考えは、遅くとも14世紀前半頃までは希薄であったと言えよう。決算残高勘定についても同様のことが言え、ニコロ・バルバリゴとアルヴィーゼ・バルバリゴの1483年2月末日の残高勘定には、資産負債に関する項目だけではなく、費用収益に関する項目もすべてが転記されている<sup>22</sup>。

1569年に出版されたピールの第2の簿記書『勘定熟達への小径』の開始財産目録の最後には、「不良債権等」(doubtfull deters.&c.)という項目が挙げられている<sup>23</sup>。ヤーメイによれば、ピールの第2の簿記書が「勘定内で不良債権をどのように処理するかに関して、読者にアドバイスを与えている最初の簿記書<sup>24</sup>」ということになる。

固定資産に対する時価評価も、すでに14世紀初めのデル・ベーネ商会の決算実務における家具・備品勘定のなかに見出される。そこでは、1318年3月5日に48フィオーリーノ5

<sup>16</sup> Alvaro [1974], Part 1, p.329, 泉谷 [1980], 62, 67 頁。

<sup>17</sup> Alvaro [1974], Part 1, p.322. この20%という金利は、最初の2か月の金利であるが、時として、それ以降になると30%の金利が課せられている事例も見出せるという。貸付日は6月30日で返済日は8月1日となっている。しかし、罰則金と位置づけられていた当時の利子は、支払日から実際の返済日(12月3日と3月20日)までの計算がなされ、プレミアム付加された金利は、40%の高利に上るという(泉谷 [1980], 70-71 頁)。

<sup>18</sup> De Roover [1974], p.149.

<sup>19</sup> Penndorf [1933], SS.37-38.

<sup>20</sup> Geijsbeek [1914], p.37, 片岡 [1967], 55 頁。

<sup>21</sup> このように、損益勘定を「寄せ集め勘定」として取り扱う考え方は、パチョーリの『スンマ』においても見られるところである(Yamey [1978], p.109.)。

<sup>22</sup> 渡邊 [1993], 31-2 頁。

<sup>23</sup> Peele [1553], The Inuennnntorie, the fifth page.

<sup>24</sup> Yamey [1982], pp.96-97.

ソルディ 8 デナリで購入した 163 枚のモミの板材が使用によって古くなったため、1321 年 9 月 1 日に 35 フィオリーノ 3 ソルディ 1 デナリに評価替えし、13 フィオリーノ 2 ソルディ 7 デナリの評価損を計上している<sup>25</sup>。また、15 世紀初めのダティーニ商会フィレンツェ支店の棚卸表でも山林等に対して時価による評価替えが行われている<sup>26</sup>。

棚卸商品の時価による評価替の実務もすでに 15 世紀初めに登場している。ダティーニ商会フィレンツェ支店では、1404 年 12 月 31 日に 84 フィオリーノ 15 ソルディで取得した商品を決算に際し売れ残った棚卸商品を 80 フィオリーノで評価し、4 フィオリーノ 15 ソルディの評価損が計上されている<sup>27</sup>。棚卸商品の時価評価の実務は、1664 年 8 月から 1673 年 7 月までのロンドン東インド会社の元帳 B-D にも見出せるところである。そこでは、棚卸資産を現在価値で評価するというのではなく、単に実務上の簡便性から、売残商品を時価で評価する実務が採られていた。なぜなら、商品購入時点では、仕入単価が明記されず、仕入に伴う付帯費用の配分も必ずしも明らかではなかったため、取得原価を帳簿上から検出するのが極めて困難であったからであろうと思われる<sup>28</sup>。また、1675 年に出版されたサヴァリー『完全な商人』でも、織物が 5%下落した時に、その価格を引き下げる処理法の説明が見出せる<sup>29</sup>。

このように、時価による取得原価の修正実務は、複式簿記の誕生と同時に行われていた。いわば、取引価格（取得原価）による測定と時価（市場価値）による評価替の測定実務は、13 世紀における複式簿記の発生と同時に併存していたといえる。取得原価主義会計と時価主義会計との併存会計である。

## 7. 18 世紀までの固定資産の時価評価

一般的に言えば、18 世紀中頃までのイギリスで出版された簿記書では、固定資産の評価は、取得原価を基準にして行われていた。しかしながら、17 世紀の後半に至ると、実際の商人の帳簿の中だけではなく、簿記書においても、時価による評価替えの手続きを説く記帳例が登場してくる。

### (1) モンテージの固定資産評価

1675 年に『簡単な借方と貸方』を著したスティーヴン・モンテージ (Stephen Montage) は、資産の勘定として借地権付き農地、馬、牛、羊、船等の勘定記帳例を示している (図表 1)。

---

<sup>25</sup> Alvaro [1974], Part 2, pp.535-6.

<sup>26</sup> Penndorf [1933], S.36.

<sup>27</sup> Penndorf [1933], S.37.

<sup>28</sup> 杉田 [2010], 40 頁。

<sup>29</sup> 岸 [1975], 263 - 264 頁。

〔図表1〕 借地権付き農地

| 1675 |                        |    | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> | 1675 |                      |    | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> |
|------|------------------------|----|-----------|-----------|-----------|------|----------------------|----|-----------|-----------|-----------|
| 4.10 | 資本金－借地権の<br>価値         | 1  | 30        | —         | —         | 4.23 | 現金－チーズとバター<br>の代金    | 2  | 22        | —         | —         |
| 20   | 現金－肥料 6 荷分             | 2  | 0         | 10        | —         | 25   | 100 荷の干草－@35s.       | 15 | 175       | —         | —         |
| 21   | 現金－小麦の種子               | 2  | 1         | 3         | —         | 5. 3 | 16 頭の子牛－<br>@17s.6d. | 11 | 14        | —         | —         |
| 24   | 現金－ベス・ホッ<br>プスの賃金      | 2  | 24        | 10        | —         | 1676 |                      |    |           | —         | —         |
| 28   | 現金－税金                  | 2  | 2         | 10        | —         | 4. 9 | 残高－借地権の価値            | 40 | 280       |           |           |
| 5. 1 | ジョン・ボートン卿<br>－6 ヶ月分の地代 | 16 | 1         | —         | —         |      |                      |    |           |           |           |
| 1676 | 損益－利益                  | 12 | 25        | —         | —         |      |                      |    |           |           |           |
| 4. 9 |                        |    | 136       | 7         | —         |      |                      |    |           |           |           |
|      |                        |    | 491       | —         | —         |      |                      |    | 491       | —         | —         |

(Montage [1675], fol.4)

この借地権付き農地勘定は、1675 年 4 月 1 日の期首の財産目録に 300 ポンドの借地権として開始記帳され、借方には農地の維持開耕に伴う肥料や種子、税金や地代を記帳している。貸方には農地の利用に伴って生じる乳製品や干草の売却収益やこの牧草で誕生した子牛 16 頭を子牛勘定に 14 ポンドで振り替える取引等が記帳されている。当該勘定の締切に際し、農地は、期末における<sup>プレゼントバリュー</sup>現在価値の 280 ポンドで評価替えされて、決算残高勘定に振り替えられている。モンテージは、注書きで、「このリースは、資本金勘定において 300 ポンドで評価されていたが、1 年経過した現在では、[取得原価から] 評価を減じた方が適切である<sup>30)</sup>」と述べ、決算にあたり、時価によって評価替えするのが好ましいとし、そこで生じた評価減を集合損益勘定に直接振り替えている。評価損益を実現損益として処理していたことになる。ここの事例は評価損の場合であるが、たとえ評価益の場合であったとしても、恐らく、所得税法が施行される 19 世紀冒頭以前のイギリスでは、それを実現損益として計上したからといって、企業にそれほど大きな影響を及ぼすことはなかったであろう。

同様に、ボナード航海向け船勘定でも、取得原価 250 ポンドを決算時点で 225 ポンドに評価替えしている。ただし、この評価損は、混合勘定として他の諸損益と一緒にして決算時点で集合損益勘定に振り替えている（図表 2）。

〔図表2〕 ボナード航海向け船

| 1675 |                  |    | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> | 1675  |                                      |    | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> |
|------|------------------|----|-----------|-----------|-----------|-------|--------------------------------------|----|-----------|-----------|-----------|
| 4.10 | 資本金－総額の<br>8 分 1 | 1  | 250       | —         | —         | 11.25 | ピーター・ビッグー<br>航海による利益の<br>私の取分 8 分の 1 | 21 | 75        | —         | —         |
| 11 2 | 現金－プレミアム<br>と保険  | 19 | 7         | 11        | 6         | 1676  |                                      |    |           |           |           |
| 1676 |                  |    |           |           |           | 4. 9  | 残高－私の持分の価値                           | 40 | 225       | —         | —         |
| 4. 9 | 損益－利益            | 39 | 42        | 8         | 6         |       |                                      |    |           |           |           |
|      |                  |    | 300       | —         | —         |       |                                      |    | 300       | —         | —         |

(Montage [1675], fol.9)

<sup>30)</sup> Montage [1675], 'Here followeth the Balance of the whole Leidger', L2. モンテージの簿記書には、通しページが付されていないため、各項目毎のタイトルと分類記号を記した。

17 世紀半ば頃までのイギリスで出版された簿記書では、資産評価の基準は、通常、取得原価によって説明されていた。なぜなら、一般的に言って簿記書は、当時のアカデミーやグラマー・スクールの教科書として出版されたもので、その主目的は、初学者にイタリア式複式簿記の基本原則を教示することにあった。そのため、期末における時価の修正記帳は複雑になり、複式簿記の基本原則の解説のためには、取得原価による繰り越し手続きだけを簡潔に説明するだけで十分と思われるからである。しかしながら、17 世紀後半になると、時価での評価を説く簿記書も散見されてくる。とりわけ、18 世紀末から、従来の伝統的な教科書用簿記書に飽き足らず、実務に直接適用できる <sup>プラクティカル・ブックキーピング</sup> 実用簿記書が相次いで出版される<sup>31</sup>。17 世紀の後半は、18 世紀に登場する教科書用簿記への反発として時価による評価替えを含んだ実用簿記書が登場してくるいわば助走期間であったといえよう。

## 8. 18 世紀における固定資産の評価方法

### (1) マルコムの固定資産評価

アバディーンで大学やエディンバラ大学で数学の教鞭をとっていたアレグザンダー・マルコム (Alexander Malcolm : 1687-1763) は、彼の簿記書『簿記あるいは商人の勘定に関する論述』において、当時、時価評価による方法も実務では既に見られていたことを窺わせる説明を行っている。ヤーメイによると「メイヤーの著作の功績が否定しがたいものとなる間に、マルコムの簿記書は、少なくとも 18 世紀の会計実務の本質を現在調べている人々にとっては、非常に満足させてくれる」と述べている<sup>32</sup>。

固定資産に関しては、「カースル通りの建物」勘定と「ブロード通りの建物」勘定の二つが例示されている (図表 3) <sup>33</sup>。もちろん、彼もまた、固定資産という概念を用いているわけではない。

〔図表 3〕 カースル通りの建物

|              |           |    |           |          |          |              |                              |    |           |          |          |
|--------------|-----------|----|-----------|----------|----------|--------------|------------------------------|----|-----------|----------|----------|
| 1729<br>8.26 | ジョン・キャンベル |    | l.        | s.       | d.       | 1729<br>8.26 | ウィリアム・デビッドソン...半年分の賃借料<br>残高 |    | l.        | s.       | d.       |
|              | 損益        | 17 | 300<br>10 | 15<br>00 | 00<br>00 |              |                              | 17 | 10<br>300 | 00<br>15 | 00<br>00 |
|              |           |    | 310       | 15       | 00       |              |                              |    | 310       | 15       | 00       |

(Malcolm [1731], fol.14)

〔図表 3〕 から明らかなように、マルコムは、固定資産としての建物勘定を商品と同様に混合勘定として処理している。減価償却が登場する 19 世紀前半までは、主として、固定資産勘定は、混合勘定として処理され、一般的に言って、時価による評価替えも減価償却の登場以降は、一時的に見られなくなる。減価償却費を計上することによって、当該固定

<sup>31</sup> 渡邊 [1993] 111-115 頁。

<sup>32</sup> Yamey, Edey and Thomson [1963], p.172-173.

<sup>33</sup> Malcolm [1731], Leger Book No.1, fol.14.

資産の減価部分が認識されることになったためではないかと推測される。

カースル通りの建物勘定は、8月26日にジョン・キャンベル氏から300ポンドで購入し、聖マルティヌス祭の日に負っている年金の4分の1にあたる15シリングを支払い、建物勘定の借方に合計額300ポンド15シリングを記帳し、決算日にその総額をそのまま決算残高勘定に繰り越している。なお、この建物は、現在は、ウィリアム・デヴィッドソンの所有で、年間20ポンドを聖マルティヌス祭（11月11日）と精霊降臨祭（復活祭後の第7日曜日ー5月の末頃）の2回に分けて、均等額の10ポンドづつを受け取っている。締切にあたって評価減は、計上されず、取得原価をそのまま次期に繰り越している。建物勘定の借方の「損益10ポンド」の記帳は、この賃借料を指し、決算時に集合損益勘定に振り替えている。

記帳例示では、取得原価で次期に繰り越す方法を取っているが、建物勘定と船勘定の本文中の説明においては、「それらを取得原価<sup>ファーストコスト</sup>で評価しなさい。その額が貸方に記帳されると、修繕費等と受取家賃や受取運送料の差額から生じる貸借差額が損益になる。……次に、新しい棚卸目録にあなたが適当と思う価額（現在の市場価値ー渡邊注）で再びそれを記帳しなさい。そして、時にはまた、あなたは、[次期に繰越される額が当初価格よりも減少しているために] 損失を被っているように見える[ことがある]。そしてその額は、損益勘定に転記されなければならない。しかし、初めの方法が私には最善と思われる。たとえこれらの基本的な考え方を通じて、諸資産の真の価値を維持することは出来ないし、しかもそれらが[最終的に] 処分されるまでは、私は、それらの諸資産を取得原価<sup>ファースト・コスト</sup>で[評価]し続ける。あるいはまた、あなた方は、[その] 時々のもう一つの価値で評価する[方法を] 選択してもかまわない。あなた方は、それらを本当の価値と思っているように<sup>34</sup>」と述べ、決算時点での資産の評価にあたっては、時価によって評価してもそれが真の価値を表しているとは限らないため、原則として取得原価で行うのが好ましく、時として、時価での評価もまた選択肢の一つに入れている。先の18世紀の会計実務の研究にとっては、マルコム<sup>34</sup>の著作は、多くの示唆を与えてくれるというヤーメイの言葉に従えば、マルコムがたとえ決算時点で時価で評価替えしたところで、それが資産の真の価値を表わしているとは限らないので、取得原価で評価の方が好ましいとしているのは、極めて興味深い。なお、マルコムは、期末棚卸商品の評価にあたっては、取得原価で行っている。

## (2) メイヤーの固定資産評価

18世紀イギリスを代表するジョン・メイヤー（Jhon Mair : 1702/3-1769）の第1の簿記書『組織的簿記』（1736）では、棚卸商品、船、建物、その他の財産についての期末における資産評価の説明と記帳例示が示されている。

第1取引例示における船勘定は、借方に取得原価、修繕費等船の維持にかかった全ての費用が記入され、貸方に売却あるいは交換した時の価額、輸送費や賃貸料等のすべての収益が記帳される。決算に際しての船、建物、あるいはその他の資産に関する勘定の締め切り方については、第3章「元帳の締切」で述べられている。締切にあたって次期に繰越す

---

<sup>34</sup> Malcolm [1731], p.90.

ときの評価額を原価で行うのか時価でするのかについての説明は、見られない。しかし、ブリタニア号の取引例示から判断すれば、決算残高勘定への期末の振替は、取得原価で行っていることが分かる<sup>35</sup>。

固定資産の評価に関する説明は、『組織的簿記』とその増補改訂版といえる『現代簿記』（1773）では、少し異なっている。すなわち、『組織的簿記』では、船、建物あるいはその他の資産の記帳と締切の説明で、「... 第3、もし貸方側に運送費や賃貸料のみが記帳されている場合は、先ず最初に、船、建物等〔の勘定〕の借方に、その運送費や賃貸料に対して、『損益』として記帳する。そして、その後で『残高』として勘定を締め切る<sup>36</sup>」と述べている。

それに対して、『現代簿記』では、「... 第3、もし貸方側に運送費や賃貸料のみが記帳されている場合は、先ず最初に、勘定の貸方側に船や建物の<sup>バリュー</sup>価額を記帳し、そしてその後で、『損益』として勘定を締め切る<sup>37</sup>」となっている。ここでいう「建物の<sup>バリュー</sup>価額」というのが、彼の文中での説明のみからでは、取得原価であるのか時価であるのか明瞭ではない。しかし、取引例示（図表4）のスループ船勘定<sup>38</sup>から明らかなように、12月31日の決算日に取得原価235ポンドでそのまま次期に繰り越している。フリート通りの建物も、同様に、取得原価で次期に繰り越している。

メイヤーの取引例示から判断すると、彼の簿記書における評価基準は、取得原価であったことがわかる。メイヤーの簿記書は、複式簿記の基本原則を簡明に説明した当時のアカデミーやグラマー・スクールの教科書と著されたものであったため、実務で見られた時価による評価替えといった煩雑な記帳例示は、避けたのではないと思われる。

〔図表4〕スループ船 ユニティー号

| 1793 |                        |    | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> | 1793 |                      |    | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> |
|------|------------------------|----|-----------|-----------|-----------|------|----------------------|----|-----------|-----------|-----------|
| 1.1  | 資本金、バージニアへの輸送、私の持分2分の1 | 1  | 470       | —         | —         | 4.5  | 現金、輸送代、2分の1諸口、4分の1売却 | 2  | 110       | —         | —         |
| 4.17 | 現金、修繕費                 | 2  | 10        | 12        | 6         | 7    | 残高、原始価格4分の1          | —  | 260       | —         | —         |
|      | 損益、利益                  | 36 | 124       | 7         | 6         |      |                      | 35 | 235       | —         | —         |
|      |                        |    | 605       | —         | —         |      |                      |    | 605       | —         | —         |

(Mair [1773], pp.180-1)

### (3) ハミルトンの固定資産評価

18世紀のイギリスを代表するもう一人の著者ロバート・ハミルトン（Robert Hamilton : 1743-1829）が著した『商業入門』（1777）では、その第1取引例示で、エディンバラのローンマーケット通りにある建物と船ハザード号の4分の1の持分の二つ固定資産が説明さ

<sup>35</sup> Mair [1736], pp.126-7.

<sup>36</sup> Mair [1736], pp.79.

<sup>37</sup> Mair [1773], pp.71-2.

<sup>38</sup> スループ船というのは、当時一般に用いられていた比較的軽装備の1本マストの縦帆装船のこと。

れている。

ハミルトンは、帳簿の締切に当たり「もし商品や他の<sup>グッズ</sup>資産<sup>プロパティ</sup>が全て[期末に]手元に残れば、<sup>バランスシート</sup>残高表<sup>39</sup>の借方に<sup>プレゼントバリュー</sup>時価<sup>プライムコスト</sup>で記帳する。そして、もしこの時価が取得原価と異なるときは、その差額は、損益勘定の適当な側に記帳される<sup>40</sup>」と述べている。すなわち、棚卸商品や固定資産を問わず、資産に関しては、時価で評価し、その差額の評価損益は、実現損益として集合損益勘定に転記する記帳法を説明している<sup>41</sup>。産業革命以前では、企業の保有する固定資産の額は、それほど大きなものではないため、評価損益を実現損益として処理したとしてもそれほど大きな問題はなく、とりわけ所得税法の制定（1799）以前では、このような処理法が一般的であった。

ローンマーケット通りの建物勘定の例示では、期首の価額が取得原価でそのまま次期に繰り越されているが<sup>42</sup>、上記の本文説明から判断すると、これは、取得原価で評価した結果ではなく、開始記帳時点の価額と4ヵ月後の時価に変動が無く、同じ評価額であったと解釈すべきであろう。

ハザード号の4分の1の持分は、取得時の3月25日では150ポンドであったが、4月30日では140ポンドになっていたので、決算時点の時価で評価している。すなわち、150ポンドの取得原価を時価の140ポンドに評価替えしているのである。10ポンドの評価損は、航海による利益の取分と相殺され、決算時に集合損益勘定に振り替えられている（図表5）。

【図表5】 船 ハザード号の持分

| 1774<br>3.25 | ウィリアム・エイ<br>ンズリー、4分の1<br>の持分 |        | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> | 1774<br>4.25 | 現金、ロッテルダムへ<br>の航海での利益の取分<br>残高勘定 |        | <i>l.</i> | <i>s.</i> | <i>d.</i> |
|--------------|------------------------------|--------|-----------|-----------|-----------|--------------|----------------------------------|--------|-----------|-----------|-----------|
| 4.30         | 損益、                          | 7<br>1 | 150<br>23 | —<br>—    | —<br>—    | 30           |                                  | 1<br>7 | 33<br>140 | —<br>—    | —<br>—    |
|              |                              |        | 173       | —         | —         |              |                                  |        | 173       | —         | —         |

(Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., pp.314-315)

第2取引例示では、固定資産として、デリジェンス号船とフリート通りの建物の二つの勘定が例示されている。両者とも期中で売却して損失が出たため、期末に当たって決算残高勘定に振り返る会計処理がなされず、したがってそれらの期末における評価額が取得原

<sup>39</sup> ハミルトンは、元帳の締切に先立ち、締切を正確に行い利益の概算を算出するために、資産・負債・資本の残高を残高表に費用・収益の残高を損益表に振り替えている。すなわち、この二つの計算表は、17世紀の冒頭、オランダのシーマン・ステフィンによって提唱され、マギー(Maggie [1718], pp.52-3)、マルコム(Malcolm [1731], p. 87)、メイアー(Mair [1736], p.87)等を経てハミルトンに継承された。様式は一見財務諸表を連想させるが、機能的には決して財務諸表ではなく、今日の精算表の役割を果たしていた。この点については、渡邊 [1993] 第3章を参照。

<sup>40</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., p.285.

<sup>41</sup> ハミルトンの売残商品の評価については、渡邊 [2005] 89-92 頁を参照。

<sup>42</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., pp.306-7.

価であったのか時価であったのかを判断することは、出来ない。フリート通りの建物勘定<sup>43</sup>は、6月8日に火災に遭い、7月6日に保険会社から保険金500ポンドを受け取り、7月8日に建物が建っていた場所を200ポンドで売却した<sup>44</sup>。最終的には120ポンドの損失が生じ、その額を集合損益勘定に振り替えている。

## 9. 棚卸資産に対する時価評価の登場

### (1) ヘイズの時価評価

18世紀のイギリスで出版された簿記書の中で、売残商品の評価基準に取得原価ではなく時価を基準にした評価方法を提唱した数少ない簿記書として、1731年にロンドンで出版されたリチャード・ヘイズ(Richard Hayes)の『現代簿記』および1741年に同じくロンドンで出版された同書の増補版といえる『ジェントルマンの完全な簿記係』を挙げることができる。

元帳諸勘定の締切に関しては、第7章から第12章の合計五つの章にわたって詳細な説明がなされている<sup>45</sup>。とりわけ、第8章「元帳を閉じることなく勘定を締切する方法」では、「.....勘定の締切にあたっては、さまざまな種類や方法が行われている。そして、先ず始めに、それがもし商品勘定であり、そして全てが売れ残ったときには、その売れ残った全ての商品に対し、勘定上の借方残高は、現在の市場価格(present market price)かあるいは取得原価(the Price they cost you)で評価する。第2に、商品の一部だけが売却されたときは、その勘定上の借方残高は、売れないままに残った商品の価値を取得原価か現在の市場価格のどちらかで[評価する]。注. 商人たちは、通常、彼らの帳簿を締切るに際し、手持ち商品をその時点で売却可能な市場価格で評価するのが一般的である。しかし、幾人かの商人は、そのようにしていない」と述べている<sup>46</sup>。

すなわち、ヘイズによると、当時の商人たちは、通常、売残商品を時価で評価していたことがわかる。しかし、ヘイズによる評価替えは、17世紀のイギリス東インド会社の棚卸商品の評価実務で見られたような簡便性を尊重する実務上の要請からではなく、締切時点における売却可能な市場価格(the Market Price they go on at, at the Time of their balancing)すなわち売価で評価することを説いている。このように見てくると、ヘイズが期末の売残商品を売却時価で評価する方法を説いた背景には、実務上の簡便さからではなく、当時の経済状況を反映してか、売手市場が前提になり、在庫品も次期には必ず売却できるのが前提になっているように思われる。それ故、売却時価で評価することによって生ずる取得原価との差額の本質が、評価益ではなく、「期待利益」ないしは「みなし売却」<sup>47</sup>、

<sup>43</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., pp.418

<sup>44</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., p.356.

<sup>45</sup> Hayes [1731], pp.75-92. and Hayes [1741], pp.75-92.

<sup>46</sup> Hayes [1731], pp.78-9. この点については、Yamey, Edey and Thomson [1963], p.116, および高寺 [1999], 95-7 頁を参照。

<sup>47</sup> 高寺 [1999] 95-7 頁。

すなわちある意味では「利益の先取り」を当期の利益計算に計上したと解することばできるのではなかろうか。

## (2) ハミルトンの時価評価

メイヤーの簿記書と共に18世紀イギリスを代表する簿記書ロバート・ハミルトン(Robert Hamilton)の『商業入門』(1777)では、その第4部「イタリア式簿記」<sup>48</sup>と第5部「実用簿記」<sup>49</sup>で簿記に関する論述が見られる。第2部のイタリア式簿記による取引例示では、売残商品の評価は、取得原価で行われている。例えば、クローバーの種勘定<sup>50</sup>では、3月12日に1,200重量ポンドを29ポンド17シリングで仕入れ、期末の4月30日付けで売残商品300重量ポンドを単価6ペンス、総額7ポンド10シリングで評価している。1重量ポンド当たりの仕入単価は、6.08ペンスになるが、計算上の端数処理を考慮すれば、売残商品の評価額と一致していると思えることができよう。なお、貸方の数量差異として摘要欄に書かれている10重量ポンドの棚卸差損は、金額欄に記帳されていない点から判断すれば、最終的には、棚卸差損として別立て控除するのではなく、自動的に売上原価に参入して処理されていたことがわかる。当時の簿記書では、このような方法で説明するのが一般的であった。

しかし、本文中の説明では、「[元帳の]締切前に…，出来るだけ速やかに商品の正確な手持ち有高を出し、その時点の時<sup>カレントプライス</sup>価<sup>ヴァリュー</sup>、すなわちその所有主が現在購入したいと思ってる価格にしたがって各商品に適正な価格を付けるのが好ましい」<sup>51</sup>と述べ、時価で評価するのが適当である旨の解説をしている。しかも、ハミルトンの時<sup>カレントプライス</sup>価<sup>ヴァリュー</sup>は、先に述べたヘイズの現在の市場価格が売却時価であるのに対し、再調達原価で評価するとしている。ヘイズは、時価(売却時)で評価する売却時価が「期待利益」、ある意味では「利益の先取り」を意味しているのに対して、再調達原価による評価は、翌期の「仕入コストの早期認識」を意味している。

第5部「実用簿記」の取引例示のポートワイン勘定では、図表6で明らかなように、仕入単価は、1大樽32ポンド、1ダース12シリングであるのに対して、期末棚卸商品の評価額は、1大樽34ポンド、1ダース15シリングで評価している。取得原価ではなく時価で評価しているのは明らかであり、評価益を計上している数少ない事例である。

<sup>48</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., pp.265-466.

<sup>49</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., pp.467-95.

<sup>50</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., pp.314-15.

<sup>51</sup> Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., p.285.

[図表 6] ハミルトンのポートワイン勘定

| 1772 | ポートワイン, 借方 |                     |     | 1772 | ポートワイン, 貸方 |    |                  |    |     |
|------|------------|---------------------|-----|------|------------|----|------------------|----|-----|
|      |            | P.                  | D.  | B.   |            |    | P.               | D. | B.  |
| 4    | 6          | J.ハートレイ, 単価 L32:12s |     |      | 4          | 10 | J.アルモンド, 単価 L34: |    |     |
|      |            | 4ヵ月の掛け              | 20  | -    |            |    | 12s              | 5  | -   |
|      |            |                     | -   | -    |            | 22 | 2 大樽             | 2  | -   |
|      |            |                     |     | 652  |            |    |                  | -  | -   |
|      | 22         | 現金, 諸費用とコルク栓,       |     |      | 5          | 22 | 諸口, J            | -  | 87  |
|      |            | 112ダース3瓶入           |     |      |            |    |                  | -  | -   |
|      |            | り2大樽                | 112 | 3    | 25         |    | 現金, 単価 L.35      | 2  | -   |
|      |            |                     |     | 12   |            |    |                  | -  | -   |
|      |            |                     |     | 3    | 7          | 16 | 現金, 単価 L.34      | 5  | -   |
|      |            |                     |     | 9    |            |    |                  | -  | -   |
| 12   | 31         | 損益, 利益に対して          | -   | -    | 8          | 7  | 現金, 単価 L.34:10s. |    |     |
|      |            |                     |     | 38   |            |    | 単価 15s.4d.       | 2  | 12  |
|      |            |                     |     | 14   |            |    |                  | -  | 76  |
|      |            |                     |     | 9    |            |    |                  |    | 4   |
|      |            |                     |     |      |            | 25 | 現金, 単価 L.34      | 2  | -   |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  | -  | 68  |
|      |            |                     |     |      | 12         | 31 | 残高勘定,            |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    | 単価 L.34: 単価 15s. | 2  | 13  |
|      |            |                     |     |      |            |    | 破損               | -  | 77  |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    | 15  |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    | 3   |
|      |            |                     | 20  | 112  | 3          |    |                  | 20 | 112 |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    | 3   |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     |     |      |            |    |                  |    |     |
|      |            |                     | </  |      |            |    |                  |    |     |

(Hamilton [1788], 2<sup>nd</sup> ed., pp.430-431.)

ただし、期末の売残商品に対する評価損益勘定は、設けられていない。したがって、期末棚卸商品の評価損益は、その原価性の有無に関わらず、自動的に、売上原価に算入されることになる。18 世紀の後半から末葉にかけて、期末棚卸商品の時価評価に関する会計処理法が登場してくる。

## 10. 取引価格会計としての取得原価と市場価値、そして割引現在価値

今日、一般に時価とは、<sup>フェア・バリュー</sup>公正価値を指している。この公正価値は、市場価値を意味し、市場によって測定された価値こそが完全かつ公正で、いかなるものさしよりも客観的であるという一種の神話が蔓延していたように思われる。まさしく公正という言葉の持つ魔術であろうか。しかしながら、この公正価値を単に時価あるいは市場価値と呼ぶならば、上述のような神話が人々の心を強く支配したであろうか。市場神話が 2008 年 9 月のリーマンブラザーズの経営破綻によってもろくも崩れ去ってしまったのは、周知のとおりである。つい 3 年程前のことに過ぎない。

この市場に過度に依存する危険性をマイケル・ブロミッチ (Michael Bromwich) は、すでに 1980 年代半ばに、警鐘を鳴らしている。「実社会においては、すべての資源や投資の機会が完全な市場で取引されているわけではない。完全な市場が損なわれている事例としては、‘人的’資産を市場に売り込んだり、他の資産と切り離して企業‘暖簾’を〔適正

に評価して] 販売することの困難さが挙げられる<sup>52)</sup>と指摘している。すなわち、「完全な [市場が担保されている] 一連の先物市場や保険 [投資] への機会が不足 [している状況] は、市場が不完全であるという更なる事例を提示している。資産の実現可能価格ないしはその再調達原価と現在使用中の価値との落差は、不完全な市場で予測される [であろう] 結果に一般的でかつ重要な事例を会計に提供している [ことになる]。・・・取引価格が現に存在していること、契約で [その価格が] 保障されていることの困難さおよび資産の特異性が、通常、不備で不完全な両者を含む市場の難しさの重要な要因に挙げられている。これらの市場が抱える諸問題は、[とりわけ] 高額な商品に [対して重要な] 会計情報をもたらすかも知れない<sup>53)</sup>と指摘している。

また、高寺貞男は、バース (Mary Barth) やプランタン (Guillaume Plantin) 等の論考を引用しながら、「あらためて指摘するまでもなく、『もしも市場がかなりの厚みをもちかつ容易に現金化できるならば、その時には、市場価格は信頼しうる尺度である』ので『市場価値測定体系の [歴史的な原価測定体系に対する] 優位性は否定できないかもしれない。[しかし] 不幸なことには、市場に不完全さが存在する時には、[市場価格が資産の『真実かつ公正な』価値ではないことがよくある』ので] 歴史的な原価 [測定] 体系と比べて市場価値測定体系の優位性はもはやそれほどはっきりしなくなる<sup>54)</sup>と指摘している。

とはいえ、すでに見てきたように、複式簿記は、その発生当初からその時々<sup>55)</sup>の市場価値によって取引を行ってきた。この市場価値 (現在価値) は、時が経つと取得原価 (過去価値) に変化する。複式簿記の生成当初より、商人たちは、現在価値と過去価値の間に落差が生じた時々、その差額を現在価値によって修正する知恵を産み出してきた。時価 (市場価値) による測定は、複式簿記の発生と同時に登場していたのである。それ故、取引時点での市場価値と決算時点での取得原価は、単に時間軸の相違によって生じる表象上の違いに過ぎず、市場価値は、本質的には取得原価と同質なものとして位置づけることができる。

アレグザンダーは、ノーブスの説く測定基準のうちの入口<sup>エントリー</sup> [価値] と出口<sup>イグジット</sup> [価値] を同様に捉え、保有<sup>ミッド</sup> [価値] とした挙げた公正価値を、入口 [価値] と出口 [価値] の二つに分類している<sup>55)</sup>。

---

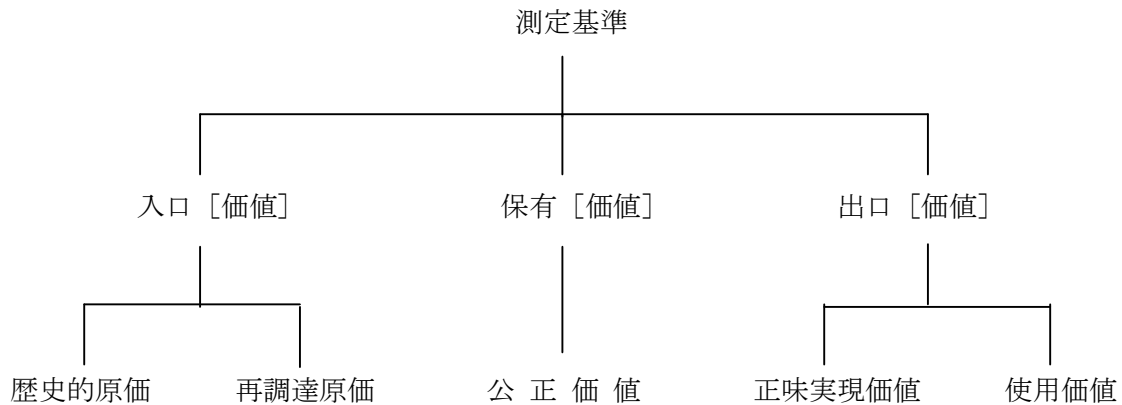
<sup>52)</sup> Bromwich [1985], p.57.

<sup>53)</sup> Bromwich [1985], p.57.

<sup>54)</sup> 高寺 [2008], 236-7 頁。

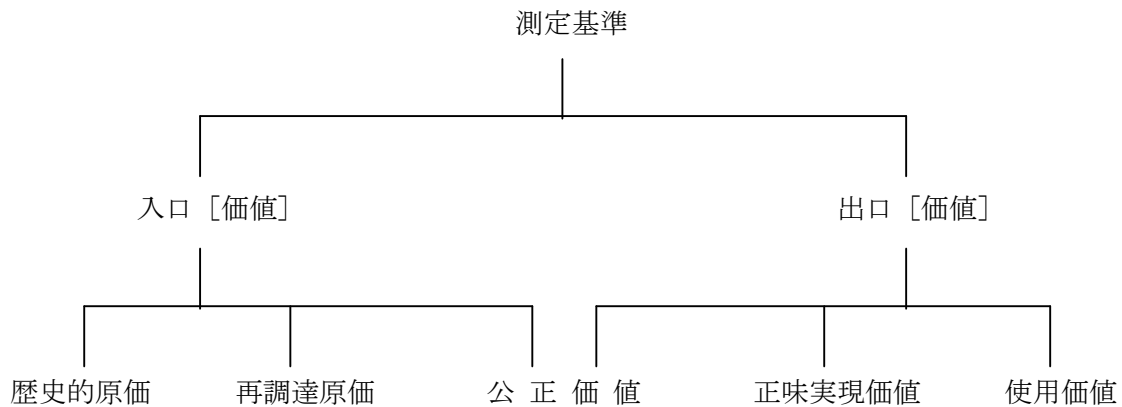
<sup>55)</sup> Alexander [2007], p.78.

【図表 7】 ノーブスによる測定基準の分類



(Alexander [2007], p.78.)

【図表 8】 アレグザンダーによる測定基準の分類



(Alexander [2007], p.78.)

この入口価値、出口価値という概念には、過去と現在と将来の三者の測定属性が含まれ、会計ならびにその計算構造を支えてきた複式簿記が発生以来最も重視してきた実現という概念が視野の中に入っていない。今日の公正価値会計の最大の課題は、この実現概念をどのように捉えるかにかかっているものと考ええる。物の価値それ自体を測定するのは、経済学の世界であり、経営者にとって重要なのは、保有する商品が今いくらの価値を有しているかではなく、現実にくらで売却できるかにかかっている。実現概念の欠如は、ノーブスもアレグザンダーの両者共に見られるところである。しかし、会計は、現実の経済事象の写像であり、決して予測による期待の世界の経済事象を映し出すものではない。実現した事実にもとづく利益計算こそが、幾多の不易流行を繰り返しながらも、その発生以来会計が変わらずに果たしてきた役割であり、それゆえにこそ 800 年もの長きに亘って信頼され続けてきた最大の要因なのである。われわれは、絵に描いた餅を食べて生きていくことは決してできない。実現という物差しを棚上げして、保有利益や評価利益によって会計上

の真の利益を測定することはできないのである。

将来において市場がどのようにその姿を変えていくのかは、現在時点ではまったく不透明ではあるが、例え市場が不完全であったとしても、その時々時点において、市場価値にもとづく取引価格は、動かしがたい客観的な実現した事実として位置づけることができる。現実には売買がなされた結果に生じる損益は、単に保有していて発生したと思われる架空利益とは、質的に異なる。取引価格、したがって取得原価による測定の最大の利点は、そこで測定された価額が歴史的な事実として、いつでもその価額の客観性と透明性、すなわち取引事実の検証を可能にさせるところにある。事実にもとづく検証可能性、ここにこそ実地棚卸で求めた利益の証明手段として完成した複式簿記記録の原点があり、会計に対する信頼性を確固たるものにした最大の要因が存する。

公正価値は、1950年代に将来キャッシュ・フローを基軸に据えた割引現在価値を原点にして、1973年にAPB オピニオン 29「非貨幣性取引の会計」において初めて完全な定義がなされた<sup>56</sup>。しかしながら、同じく公正価値と呼ばれたとしても、一般に時価と呼ばれる市場価値は、1950年代以降に登場する将来キャッシュ・イン・フローを基軸に据えた割引現在価値を原点に置く公正価値とは、その本質において大きく異なる。すでに述べたように、時価によって取引時点の価格を補正する方法は、複式簿記の発生と同時に登場している。貸付債権の時価評価、すなわち貸倒損失の計上、あるいは備品や棚卸商品の評価損の計上は、すでに14・5世紀のイタリア商人の帳簿の中に散見される。取得原価による測定と時価（市場価値）による測定の両者は、複式簿記の発生当初より併存していた。複式簿記は、生まれながらにして時価と原価の併存会計であったといえる。

取引時点においては、すべてが市場価値（現在価値）で取引され、その価格は、時間の経過した決算時点で取得原価（過去価値）に変様するに過ぎない。換言すれば、市場価値測定会計は、広義の取得原価主義会計（過去会計と現在会計の両者を含む）、すなわち取引価格会計（transaction-price accounting）の枠組みの中で捉えられるものであり、同様に公正価値会計の範疇に属する未来会計としての割引現在価値会計とは、その本質を異にしている。同じく市場価値でも、取引価格会計に属する市場価値と公正価値会計に属する市場価値の両者を区分するのは、実現概念である。

今日の公正価値会計にとっては、もはや実現概念など何の意味も持たないのかも知れない。しかし、経済学の分野ならいざ知らず、会計の世界にとっては、実現という概念は、極めて重要である。われわれは、たとえそれがどんなに美味しそうに描かれたものであったとしても、絵に描いた餅を食べて空腹を満たすことは決してできないのである。複式簿記誕生当初における利益概念は、実際に手に入れることのできる実現利益こそが真の利益であって、絵に描いた餅のごとき未実現の利益などはまさに絵空事であり、当時の商人たちにとっては何の意味も持たなかった。とりわけ、所得税法が施行された19世紀以降では、もちろん今日においても、現実社会における会計的な利益にとっては、実現概念が極めて重要である。会計上の利益の本質は、配当可能な実現利益であり、決して包括利益ではな

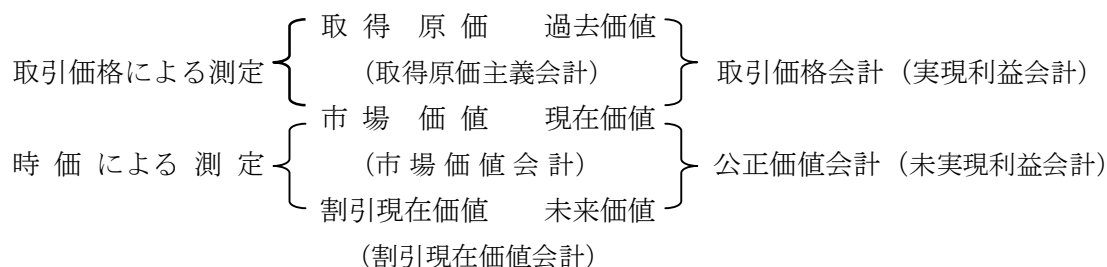
---

<sup>56</sup> Bromwich [2007], p.49.

いのである。

取得原価と市場価値と割引現在価値の3者の関係を整理すれば、以下ようになる。

【図表9】取引価格会計と公正価値会計の関係



市場のないものに対しては、市場価値で測定するわけにいかない。そのため、その測定のためには、類似の資産の市場価値で類推するか、あるいは当該資産や負債の将来キャッシュ・フローを予測し、そこから将来利息を現在価値に割り引いた価額をもって時価と見なす。いわば予測の二乗である。予測というのは、外れるから予測であって、このように予測に予測を掛け合わせた割引現在価値のどこにわれわれは、会計的真実や取引の客観性を求めれば良いのであろうか。

私は、このような、割引現在価値という得体のしれない評価手段は、信頼性を基軸に置く会計の世界の物差しとしては、不適切であると思っている<sup>57</sup>。測定基準としての基本は、取引価格（取得原価）である。取得原価の最大の特徴は、それが現実取引された客観的な価額であるということに加えて、その価額は、実際に取引した証憑書類によって検証することが可能なのところにある。この事実性（客観性）と検証可能性（透明性）に支えられた信頼性こそが会計ないしはその計算構造を支えてきた複式簿記の原点なのである。信頼できるからこそ、会計ないしは複式簿記は、800年もの長きにわたり滔々と継承されてきた。ファイナンスの世界ならいざ知らず、会計学の世界は、決して目的適合性や有用性を第一とした今日の行き過ぎた意思決定有用性アプローチのみが大手を振ってのし歩く世界ではないのである。

## 11. 企業利益にとっての実現概念の重要性

すでに明らかになったように、取得原価というのは、単に過去において取引が行われた

<sup>57</sup> 種々の引当金の設定額は、多くは動態論以降に登場してくるが、割引現在価値によって算出されているのではないかと一部の見方もある。しかし、例えば貸倒引当金は、単に過去の経験値、すなわち過去に実際に発生した金額から算定したものに過ぎず、将来のキャッシュ・アウト・フローの割引計算によって求められた数値と解釈すべきではない。換言すれば、貸倒引当金は、過去の現実発生した数値から現在の金額を割り出しているに過ぎず、不確定な将来の予測にもとづいて現在の数値を推測しているわけではない。

時点の過去価値，すなわち歴史的価値を指すだけではなく，今まさに取引が行われている取引時点の現在価値，すなわち市場価値をも同時に指すことになる。しかし，同じく現在の価値を表わす市場価値も実現という尺度によって，取引価格会計として広義の取得原価会計に含まれる市場価値と将来キャッシュ・フローによって測定する未来会計の範疇に属する公正価値会計に分かれる。

投資家や与信者にとって有用な会計情報が当期純利益ではなく包括利益，ないしは企業価値にあるとする立場からすれば，実現などという概念は，もはや死語なのかもしれない。しかしながら，歴史的に見ても，会計的利益にとってはまさにこの実現概念こそが最も重要な要素であったといえる。19 世紀半ばのイギリスで誕生する今日のキャッシュ・フロー計算書の萌芽である比較貸借対照表を産み出した直接的な要因もまた，在庫の中に埋没してしまった利益，広い意味では，未実現利益と同様に利益と名ばかりで，直ちに資金として利用できない利益が果たして真の利益と言えるのかといった素朴な疑念が出発点にあったといえよう。

具体的には，19 世紀半ばに作成された今日のキャッシュ・フロー計算書の萌芽と言える比較貸借対照表を作成したダウリス製鉄会社の決算実務の中に見出せる。ダウリス製鉄会社は，南ウェールズ，グラモーガンシャーのマーサ・ティドヴィル（Merthyr Tydfil）近郊ダウリスに，1759 年 9 月 19 日に 8 人の仲間とともにトーマス・ルイス（Thomas Lewis）によって，総額 4,000 ポンドの出資額で組合として設立された<sup>58</sup>。1763 年に，溶鉱炉設置のための土地を，85 年間，年 5 ポンドないし 26 ポンドでリースしている<sup>59</sup>。その後同組合は，1782 年には，出資額を 20,000 ポンドに増額し，1787 年には資本金 38,000 ポンドをもって株式会社に改組した。1899 年 9 月 27 日に，ダウリス製鉄・石炭株式会社として，資本金 1,100,000 ポンドで再編された<sup>60</sup>。

19 世紀に入ると，ダウリス製鉄会社は飛躍的な発展を遂げ，19 世紀前半には，ついに，それまで <sup>ビッグ・アイアン</sup> 銑鉄の生産高では最大のシェアを誇っていた中部イングランドのシュロップシャーやスタフォードシャーを抜き，最高 40% のシェアを占め，最盛期には，8,500 人を超える従業員を抱えた世界最大の製鉄会社にまで成長するに至った。その主力商品は，鉄道建設に伴う練鉄製のレールであった。1805 年までには，ダウリス製鉄会社の溶鉱炉での生産高は，年間ほぼ 2,100 トンを超え，この数字は，当時のイギリス国内の平均量を十分に上回っていたと言われている。1815 年に 5 基目の溶鉱炉が操業されたときには，銑鉄の生産高は，年間 15,600 トンにも及んだ。1810 年には 9,846 ポンドであった利益も 1814 年

<sup>58</sup> Jones [1987], p.3. 18 世紀初めのイギリスの小市民の年収は，およそ 50 から 100 ポンド，ジェントルマンが体面を保って生活していくための最低年額が 300 ポンド程度必要だったと言われている（目羅訳 [1996]，xix 頁，羽田 [2010]，44 頁）。18 世紀の初めから末までの物価は，比較的安定していたことを考慮すると（松井 [1991]，294-5 頁），組合として設立された当初の 4,000 ポンドの出資額というのは，現在の日本円に換算すると，およそ 3 億 2 千万円程度の元手であり，株式会社に改組した時の資本金は，ざっと 30 億円程度であったと推測できる。

<sup>59</sup> Glamorgan County Record Office [1960], p.2.

<sup>60</sup> Edwards & Baber [1979], p.139.

の決算では大幅に増益し、16,528 ポンドにも達した<sup>61</sup>。1840 年には 5,000 人の労働者を雇用し、1845 年に 18 基の溶鉱炉を持ち、生産高は年間 45,760 トンにも及んだ<sup>62</sup>。

ダウリス製鉄会社が、企業の拡大に伴う資本的支出を、増資や借入金にのみ依存するのではなく、利益の増大によって内部留保された剰余金によっても行おうとした。しかしながら他方では、このような拡大路線は、巨大な製鉄の需要を賄うために、棚卸商品の保有を著しく増加させた<sup>63</sup>。その結果、損益計算書や貸借対照表上では多くの利益が表示されているにもかかわらず、そのほとんどは、在庫として眠ってしまっていたのである<sup>64</sup>。すなわち、現実には、獲得した利益によって新たな設備投資を行おうとしたとき、膨大な利益を獲得していたにも関わらず、利益を遥かに上回る在庫を抱え、実際の投資資金が不足ないしは存在しないという事態が生じていた。

この棚卸商品の増加は、企業利益に大きな影響を及ぼしたのはいままでの間でもない。それは同時に、運転資金の不足という状況にも大きな影響を及ぼしたものである。その結果、「いったい利益はどこにいったしまったのか？」という疑問を生じさせた。換言すれば、たとえ貸借対照表や損益計算書において巨額の利益が計上されたとしても、その利益額を設備投資に使用しようとしたとき、それに相当する現実の現金資金が存在しないといった状況が生まれ、その結果、「利益とはいったい何なのか？」といった素朴な疑問が生じてきた。いわば、利益の質が問い直されたのである。その答を求めるために、比較貸借対照表が作成され、発生基準によって算出された利益の行く先を解明しようとしたのである。このことは同時に、発生基準に基づく利益の認識だけでは、現実の経営、具体的には設備投資を行うときの資金計画ないしは資金計算にとって、必ずしも十分な情報提供にはならないことを示している。いわんや、公正価値による評価替えによって計上された未実現の評価損益などは絵に描いた餅に過ぎず、およそ会計上の利益としては、何の意味をなさないのである。企業経営に当たり、真に活用できる利益であるか否かの基準は、それが実現したものであるのか否かにかかっているということである。

かかる状況を明らかにするため、ダウリス製鉄会社の工場長は、1856 年と 1863 年の 7 年間の資産・負債の増減を比較し、発生基準で求められた利益の本質を明らかにしようとしたのである。このことは、次のような手紙の文面から明瞭に窺い知ることができる。「私は、この 7 年間で獲得された『利<sup>プロフィット</sup>益』と呼ばれているものが原材料や製品の在庫の巨大な蓄積であるということに気がつきました。昔からの言葉の意味での『利益』は、企業が健全で順調にいつている状態のもとで、設立の時から [いつでも] 引き出すことができ、多

<sup>61</sup> Jones [1987], pp.41-2. ここでの本文中の説明では、1814 年の利益額は 16,528 ポンドとなっているが、[図表 1] の 1814 年のそれは 16,538 ポンドとなっている。

<sup>62</sup> Jones [1987], p.107.なお、溶鉱炉の数は、1790 年 2 基、1795 年 3 基、1810 年 4 基、1820 年 7 基、1825 年 11 基、1835 年 13 基、1840 年 17 基、1845 年 18 基、1855 年 18 基と飛躍的に増加して行った (Jones [1987], p.66)。

<sup>63</sup> Edwards & Baber, [1979], p.145.

<sup>64</sup> 1863 年 3 月末の貸借対照表では、126,406 ポンド 17 シリング 8 ペンスの利益を獲得しているにも関わらず、在庫は、255,134 ポンド 4 シリング 3 ペンスにものぼり、利益の約 2 倍にも達していた (Glamorgan Record Office, D/DG, E8, 渡邊 [2005], 183 頁)。

くの他の資産、土地、鉄道あるいは同様なものに投資することのできる収入として自由に使える余剰金でのごとくでした<sup>65</sup>」と。

例え現実に売却がなされ、すでに収益として計上している利益であっても、その売上収益が現実に回収されない限りその利益は、経営者にとっては、真の利益と見なすことができないのである。とりわけ、絵に描いた餅のような評価損益を会計上の利益として認識することは、正常な生産活動を行っている企業経営者にとっては、リスクを背負うことこそあれ、決して何のメリットにもならない。

## 12. 信頼性、検証委可能性の後退と忠実な表現

FASB は、1980 年 5 月に発表した SFAS 第 2 号「会計情報の質的特徴」において、会計情報を有用なものとするために必要な質的特性について検討している。そこでは、「財務報告は、現在および将来の投資者、債権者その他の情報利用者が合理的な投資、与信およびこれに類似する意思決定を行うのに有用な情報を提供しなければならない<sup>66</sup>」とし、その有用性を担保するものとして、目的適合性と信頼性の二つを対等な関係で位置づけていた<sup>67</sup>。この段階では、いわば信頼できる情報でなければ有用でないということを明確に認識していたのである。

しかしながら、安定的な配当を期待する多くの一般の株主ではなく、投機的利潤を期待する膨大な資金力を有するごく一部の投機家からの企業への要求ないしは圧力が強まってくると、必然的に、経営者たちは、彼らの要求に応えるような行動を採らざるをえなくなる。すなわち、継続的な記録によって算出された当期純利益情報ではなく瞬間瞬間によって変動する企業価値情報、あるいは将来キャッシュ・フロー情報の提供を余儀なくされてくる。投機家の関心は、正常な経営活動にもとづいて獲得される成果がいくらあるのかではなく、今保有している株式を売り抜ければいくら投機的利潤を得ることができるのかにある。彼らヘッジ・ファンドや投資ファンドに代表される投機家たちは、複式簿記にもとづいて算出される当期純利益などにはほとんど関心がなく、今まさにその瞬間における企業価値がいくらであるかに最大の関心を払う。この 1 年でいくら成果を上げたかといった、過去ないしは現在の情報ではなく、将来どれだけのキャッシュ・イン・フローを生み出すことができるのかといった未来情報こそが彼らにとって重要な情報なのである。

その結果、大株主である投機家の要求にもとづいて、企業は、取得原価を基軸に据えた発生基準にもとづく当期純利益情報よりも公正価値によって測定された包括利益情報ないしは企業価値情報の開示を優先するに至った。とりわけ金融商品にとっては、現在の市場価値ないしは割引現在価値を認識できる貸借対照表に重点が置かれ、損益計算書の役割は、大きく後退していくことになる。極論すれば、損益計算書は、企業価値計算のもとでは、もはや不要な計算書になる。

<sup>65</sup> Glamorgan Record Office, D/DG, E3(ii), pp.24-5.

<sup>66</sup> FASB [1980], p.9. 平松, 広瀬共訳 [1994], 70-71 頁。

すでに第 3 節で述べたが、複式簿記は、実地棚卸によって求めた資産負債の現在価値を事実にもとづく継続的な記録で求めた集合損益勘定によって証明することによって成立した。会計の計算構造を支える複式簿記を成立させたのは、実地棚卸による有価計算の証明道具と成立したのである。すなわち、事実にもとづいて計算された利益の信頼性、したがって誰によってもそこで計算された数値の正確性ないしは事実性を確認できる検証可能性が担保されていることこそが会計の本質なのである。この事実にもとづく正確性、検証可能性に担保された信頼性こそが会計を 800 年もの長きにわたって継続せしめてきた最も重要な要因なのである。この事実を否定して、会計は成立しない。

しかしながら、会計の有用性が過度に主張されてくると、当初は、信頼できる情報こそが有用であると言っていた SFAS あるいは IFRS が有用な情報を提供するためには、この信頼性が足かせになってきた。そのため、近年では、信頼性や検証可能性を会計基準設定の基本的特性から後退させ補正的特性へといわば降格させたのである<sup>68</sup>。

測定の信頼性に関して、IFRS は、「ある項目を認識するための第 2 の基準は、当該項目が信頼性をもって測定できる原価又は価値を有していることである。多くの場合、原価又は価値は見積もらなければならない。合理的な見積もりの採用は、財務諸表の作成に必要不可欠であり、信頼性を損なうものではない<sup>69</sup>」とし、新しい概念フレームワークから信頼性を排除し、それに代わって「忠実な表現<sup>フェイスフル・リプレゼンテーション</sup>」という用語を用いた。「その理由の一つは、『信頼性』の曖昧さに起因する公正価値評価批判がしばしば起こったからであった<sup>70</sup>」と言われている。まさしく、主客転倒である。いかなる情報にとっても、最も重要な要因は、信頼性にある。一体、信頼できない情報など正常な企業活動を行っている企業にとっていかにどの価値があるのであろうか。信頼性は、事実と検証可能性によって担保されているのは言うまでもない。

信頼性が IFRS の会計基準の基本的な質的特性から外されたばかりではなく補助的な質的特性にすら位置づけられることもなく、またこの信頼性を担保する検証可能性が補助的な質的特性へとある意味では格下げになったのは、まさにしく IFRS や SFAS が有用性を錦の御旗に、目的適合性にそぐわない情報をすべて排除しようという意向である。会計基準の設定に当たって、むしろ、排除されなければならないのは信頼性ではなく、有用性という名のもとで不確実な予測にもとづいて作成される情報の方ではなかろうか。

この点に関して、IFRS は、「財務報告書は、経済現象を言語と数字で表現するものである。有用であるためには、財務情報は、目的適合性のある現象を表現するだけでなく、表現しようとしている現象を忠実に表現しなければならない。完璧に忠実な表現であるためには、描写は 3 つの特性を有する。それは『完全』で、『中立的』で、『誤謬がない』ということである<sup>71</sup>」としている。一読すれば、忠実な表現とは、経済現象を忠実に表現する

<sup>67</sup> FASB [1980], p.15. 平松, 広瀬共訳 [1994], 77 頁。

<sup>68</sup> 岩崎 [2011], 31-34 頁。藤井 [2011], 32 頁。

<sup>69</sup> IASB [2010], Chapter 4, F4-41. 『国際財務報告基準 (IFRSs)』[2011], 4-41 頁。

<sup>70</sup> 徳賀 [2011], 32 頁。

<sup>71</sup> IASB [2010], Chapter 3, FQC12. 『国際財務報告基準 (IFRSs)』[2011], QC12。

かのような印象を与えるが、事実としての経済現象ではなく、あくまでも目的適合性にかなった経済現象を忠実に表現することなのである。すなわち、IFRS2011によると、目的に適合しない情報であれば、たとえそれが真の経済現象であったとしても、投資意思決定や与信にとっては、情報の忠実な表現には成り得ないのである。

### 13. むすびに代えて－会計の本来的役割－

当時の商人たちは、悠久の歴史の中で、自らが培ってきた商取引における慣習や約束事を昇華させ、キリスト教社会の規律の中で、損益計算のための極めて合理的な記録計算システムを創りあげていった<sup>72</sup>。これが複式簿記である。

ビランチオ（利益処分結合財産目録）による利益の分配計算の証明手段として完成した複式簿記が記録の信頼性を重視し、証拠性の高い証明手段としての原始記録を第一に考え、その立脚基盤を原初記録としての取得原価においていたのは、必然の帰結である。すなわち、会計は、生まれながらにして取得原価、すなわち取引価格をその立脚基盤とすると同時に、時の経過によって生じる価格差異を時価によって修正するシステムを内包しながら展開してきた。それ故、取得原価（過去価値）と市場価値（現在価値）は、単に時間軸の相違によって生じる差異に過ぎず、両者の間に本質的な違いはない。換言すれば、市場価値測定会計は、取得原価主義会計の中に包含される。しかし、将来の予測を含む割引現在価値（未来価値）会計は、同じく公正価値会計と呼ばれても、市場価値会計とは明確に区分して考えなければならない。

今日、会計の主要な役割は、情報提供機能にある。そのためには、提供される情報が現在および潜在的な投資者、融資者やその他の債権者にとって有用な情報でなければならない

---

<sup>72</sup> キリスト教社会で利子禁止令（旧約聖書『申命記』にある戒律「汝の兄弟より利息を取るべからず、即ち金の利息食物の利息など凡て利息を生ずべき物の利息を取るべからず」岩井 [1992], 24 頁）が支配していた当時において、金銭貸借の返済遅延に伴う利子をどのように解釈するかについては、スコラ学者等によって論じられていた。トマス・アクィナス（1225 頃 - 1274）は、返済遅延によって「期待利益の喪失」が生じるため、遅滞期間に限ってその喪失分を請求できると考えた。13 世紀後半には、このような考えが少しずつ広まっていく。当初は、ルカの福音書の「汝らそこからなにものも望まずして貸し与えよ」というように、徴利を厳密に禁止していたが、13 世紀頃になると、聖書が禁じているのは、単に消費貸借（金銭貸借）のみで投資貸借、すなわち通常の商取引で利益を上げる行為についてはその例外とみなし、やがてはこの考えを消費貸借（金銭貸借）にまで拡大し、徴利の正当化を論証する合理的根拠を導き出そうとした。その出発点になったのは、教皇グレゴリウスが発令した教令 *Naviganti*（航海条例：1230 年頃）である。それ以降、投資貸借、すなわち商取引における利益は、消費貸借、すなわち金銭貸借における徴利とは分けて考えられ、やがて徴利も認める理論が徐々に整備されてくる（大黒 [2006], 40－50 頁）。いうまでもなく、商取引における利益は、ある価値体系と他の価値体系との間にある差異（岩井 [1992] 58 頁）によって、具体的には空間差異（地域格差による為替差異）と時間差異（取得時点と現在価値との価格差異）から生じるもので、必ずしもキリスト教の教えに反する不当な行為とは見なされなかったのであろう。

いというのが国際会計基準やアメリカ基準の基本的な考え方である。IFRS2011によれば、「財務情報が有用であるべきだとすれば、それは目的適合的で、かつ、表現しようとしているものを忠実に表現しなければならない<sup>73</sup>」とし、有用な財務情報の質的特性として目的適合性と忠実な表現の二つを挙げている。

800年もの永きにわたり社会の中で容認されてきたのは、会計の計算構造を支えてきた複式簿記が収益費用アプローチを原点に事実にもとづく検証可能性を担保した信頼性によって支えられてきたからである。資産負債アプローチ偏重の昨今の会計観のもとでは、結果としての実践的行動（その結果が貸借対照表の資産や負債や純資産として表示される）が重視されているが、この具体的な行為は、その原点になる抽象的な心や思い（貸借対照表の具体的な資産や負債等を生み出した原因としての商行為、すなわち費用や収益を示した損益計算書）がなければ、実在していると思われる資産や負債や純資産もまた存在しなくなる。すなわち、資産負債アプローチによる会計観、換言すれば貸借対照表に過度に重点を移した今日の会計観では、取引の実像を捉えることができないし、決して会計の本質を明らかにすることもまたできないのである。

2011年3月11日の東日本大震災の後で、繰り返し繰り返しテレビを通して届けられたキャッチコピー、「『こころ』は誰にも見えないけれど、『こころづかい』は見える。『思い』は見えないけれど、『思いやり』は誰にでも見える<sup>74</sup>」。この衝撃的なメッセージは、多くの人の心を強く引きつけた。困った時にこそ、心の思いを行動に移すことの大切さ、理論だけではなく実践の大切さを説いたものである。しかし、この言葉を異なる角度から捉えてみると、ある意味では結果を重視する現代社会の風潮を現していると言えなくもない。もちろん、結果だけが忽然と現れるものではない。意識としての「こころ」がなければ実在としての「こころづかい」は生まれず、「思い」がなければ「思いやり」も決してまた生まれてくることはない。逆に、「こころづかい」を伴わない心は、何の意味もないし、「思いやり」のない思いなどは、絵に描いた餅に等しい。いわば「こころ」と「こころづかい」、「思い」と「思いやり」は、単に一つの心象を二面的に捉えた表現に過ぎず、われわれが生きていく上では、どちらか一方だけでは、意味をなさないのである。

資産負債アプローチ偏重の昨今の会計観のもとでは、「もの」の世界、すなわち結果としての実践的行動（その結果が貸借対照表の資産や負債や純資産として表示される）が重視されているが、この具体的な行為は、その原点になる「こと」の世界、すなわち抽象的な

<sup>73</sup> IASB [2010], Chapter 3, FQC4. 『国際財務報告基準 (IFRSs)』[2011], QC4。

<sup>74</sup> このメッセージは、宮沢章二の『行為の意味』という詩の1節からとってきたものである。原詩では、次のようになっている。「—あなたの〈こころ〉はどんな形ですか と人に聞かれても答えようがない 自分にも他人にも〈こころ〉は見えない けれどほんとうに見えないのであろうか 確かに〈こころ〉はだれにも見えない けれど〈こころづかい〉は見えるのだ それは人に対する積極的な行為だから 同じように胸の中の〈思い〉は見えない けれど〈思いやり〉はだれにでも見える それも人に対する積極的な行為なのだから あたたかい心があたたかい行為になり やさしい思いがやさしい行為になるとき 〈心〉も〈思い〉も初めて美しく生きる —それは人が人としていきることだ」(宮沢[2010] 108-109頁)。

心や思い（貸借対照表の具体的な資産や負債等を生み出した原因としての商行為、すなわち費用や収益を示した損益計算書）がなければ、実在していると思われている資産や負債や純資産もまた存在しなくなる。その結果、資産負債アプローチのみによる会計観、換言すれば貸借対照表に過度に重点を移した今日の会計観では、取引の実像を捉えることができないし、決して会計の本質を明らかにすることもまたできないのである。会計ならびにその計算構造を支える複式簿記の原点は、いつでも誰によっても検証可能であり、継続的な記録を前提にした、事実性と検証可能性に支えられた信頼性にこそ求められなければならない。

換言すれば会計現象もまた同様であり、一つの商取引は、必ず、あるときは原因と結果、フローとストック、意識と実在、損益計算書と貸借対照表の二つの側面を内在していることになる。それ故、その取引を記録する技法としての簿記もまた、二面的な記録、すなわち複式簿記でなければ、商取引の記録媒体として実質的な意味をなさい。今日の資産負債アプローチに見られるように、行き過ぎた有用性のために、貸借対照表のみを、したがって結果のみを重視する会計観は、歴史的にも、論理的にも、心象的にも人間社会において市民権を勝ち取るものではないものと思われる。

われわれ会計に携わる者は、昨夏、突然に降って湧いた IFRS の適用範囲の縮小議論や延長議論に惑わされることなく、会計の本来的役割が何であるのかを通して、過去に「あった会計」や現に「ある会計」の単なる解釈ではなく、また将来にこう「あって欲しい会計」への幻想でもない、現実の実現可能な「ありうる会計」の測定手段を求めていくことが重要になる<sup>75</sup>。

意思決定有用性アプローチにその軸足を置く金融資本中心の世界的な流れの中で、株価の変動との関連においても、「われわれは、包括利益が純利益よりも企業成果と（説得力の見地からしても）より強く結びついているという明確な証拠を見出し得ない<sup>76</sup>」という実証研究もすでに報告されているように、今一度、モノづくりを基軸に据える日本経済を再生させるためにも、包括利益情報に対する当期純利益情報の存在意義を、単に信頼性の観点からだけではなく有用性の側面からも、再認識する必要があるのではなかろうか。

---

<sup>75</sup> 高寺貞男は、「もしも、未来の会計を構想して、現在の会計を変革する知的戦略を欠いたまま、会計の記述的研究を独立的に進めたならば、過去と現在の会計を解釈するよりもむしろそれらを正当化することになるであろう。それとは反対に、会計が行われている社会的・組織的關係状況を見無視して、会計の規範的研究を独立的に進めたならば、『ありえない』会計を幻想することはできても、社会的容認をうることはできず、実験的失敗に終わってしまうであろう。それゆえ、未来に『ありうる』会計を構想すると同時に、過去に『あった』会計と現に『ある』会計に新しい解釈を与えるためには、会計の記述的研究と規範的研究を統合することが必要となる」と指摘されている（高寺 [1988]「まえがき」i）。

<sup>76</sup> Dhaliwal, Subramanyam and Trezevant [1999], p.47.

【参考文献】

- AAA [1966], *A Statement of Basic Accounting Theory*, Illinois, 飯野利夫訳 [1969], 『アメリカ会計学会基礎的会計理論』 国元書房。
- Alexander, David [2007], “Recent history of fair value”, Walton, Peter ed., *The Routledge Companion to Fair Value and Financial Reporting*, New York.
- Alvaro, Martinelli [1974], *The Origination and evolution of Double Entry Bookkeeping to 1440*, Part1 and Part 2, Denton.
- Barth, Mary [2006], “Including Estimates of the Future in Today’s Financial Statements”, BIS Working Paper, No.208, August.
- Bromwich, Michael [1985], *The Economics of Accounting Standard Setting*, Prentice Hall.
- [2007], “Fair values: imaginary prices and mystical markets. A clarificatory review”, Walton, Peter ed., *The Routledge Companion to Fair Value and Financial Reporting*, New York.
- De Roover, Raymond [1938] “Characteristics of Bookkeeping before Pacioli”, *The Accounting Reviews*, Vol.XIII No.2.
- [1956], “The Development of Accounting prior to Luca Pacioli”, in A.C.Littleton and B.S.Yamey eds., *Studies in the History of Accounting*, London.
- [1974], *Business, Banking, and Economic Thought*, Chicago & London.
- Dhaliwal, Dan, K.R. Subramanyam and Robert Trezevant [1999], “Is comprehensive income superior to net income as a measure of firm performance”, *Journal of Accounting and Economics*, Vol.26, Nos.1-3.
- Dowling, Daniel [1765], *A Compleat System of Italian Book-keeping*, Dublin.
- Edwards, J. R. & C. Baber [1979], “Dowlais Iron Company: Accounting Policies and Procedures for Profit Measurement and Reporting Purposes”, *Accounting and Business Research*, Vol.9 No.34.
- FASB [1980], *Statement of Financial Accounting Concepts*, No.2 “Qualitative Characteristics of Accounting Information”. 平松一夫, 広瀬義州共訳 [1994] 『FASB 財務会計の諸概念 [改訳新版]』 中央経済社。
- Geijsbeek, John B. [1914], *Ancient Double-Entry Bookkeeping*, Denber.
- Glamorgan County Record Office [1960], *Iron in The Making.Guide to Exhibition Held at County Hall*, Glamorgan County Records Committee.
- Glamorgan Record Office, D/DG, E3(ii).
- Hamilton, Robert [1788] 2<sup>nd</sup> ed. (1<sup>st</sup> ed. 1977), *A Intro-duction to Merchandise*, Edinburgh.
- Hayes, Richard [1731], *Modern Book-keeping: or, The Italian Method improved*, London.
- [1741], *The Gentleman’s Complete Book-keeper*, London.

- IASB [2010], *Conceptual Framework for Financial Reporting 2010*.
- Jones, Edgar [1987], *A History of GKN* (Vol.1: Innovation and Enterprise, 1759-1918), Houndmills.
- Mair, John [1736], *Book-keeping Methodiz'd*, Edinburgh.
- [1773], *Book-keeping Moderniz'd*, Edinburgh.
- Magghie, Alexander [1718], *The Principles of Book-keeping*, Edinburgh.
- Malcolm, Alexander [1731], *A Treatise of Book-keeping, or, Merchants Accounts*, London.
- Mellis, Jhon [1588], *A Briefe Instruction and Manner hovv to keepe bookes of Accompts*, London.
- Monteage, Stephen [1675], *Debtor and Creditor made Easie: or A Short Balance of the whole Leidger*, London.
- Nobes, C. [2001], *Asset Measurement Basis in UK and IASC Standards*, London.
- Peele, James [1553], *The Manner and Fourme how to kepe a perfecte reconyng*, London.
- Penndorf, Balduin [1933], *Luca Pacioli Abhandlung über die Buchhaltung 1494*, Stuttgart.
- Plantin,Guillaume, Haresh Sapra and Hyun Song Shin [2004], *Fair Value Reporting Standards and Market Volatility*, Warking Paper, Carnegie Mellon University, University of Chicago and LSE, October, 2.
- Porter, Roy [1982], *English Society in the Eighteenth Century*, (Revised edition 1990), London. 目羅公和訳 [1996]『イングランド 18 世紀の社会』法政大学出版局。
- Stevin, Simon [1605], *Vierde Stvck Der Wisconstighe Ghedachtnissen Vande Weeghconst*, Leyden.
- Yamey, Basil S. [1978], *Essays on the History of Accounting*, New York.
- [1982], *A Further Essays on the History of Accounting*, New York & London
- Yamey, Basil S., H.C. Edey, and Hugh W. Thomson [1963], *Accounting in England and Scotland:1543-1800*, London.
- Ympyn, Christofells Jan [1543], *Nouuelle Instruction*, Antwerpen.
- 石川純治 [2010]『複式簿記のサイエンスー簿記とは何であり、何でありうるのかー』税務経理協会
- 泉谷勝美 [1980]『複式簿記生成史論』森山書店。
- 井上良二 [2008]『新版財務会計論』税務経理協会。
- 入不二基義 [2008]『時間は実在するか』講談社現代新書，第 7 刷。
- 岩井克人 [1992]『ヴェニス商人の資本論』講談社文庫。
- 岩崎 勇 [2011]「IFRS の概念フレームワークについて」『會計』第 180 巻第 6 号。

- 大森荘蔵 [1996] 『時は流れず』 青土社。
- 大黒俊二 [2006] 『嘘と食欲－西欧中世の商業・商人観－』 名古屋大学出版会。
- 片岡義雄 [1967] 『増訂パチョーリ「簿記論」の研究 [第二版]』 森山書店。
- 岸 悦三 [1975] 『会計生成史－フランス商事王令会計規定研究－』 同文館。
- 木村 敏 [1982] 『時間と自己』 中公新書。
- 斎藤静樹編著 [2002a] 『会計基準の基礎概念』 中央経済社。
- 斎藤寛海 [2002b] 『中世後期イタリアの商業と都市』 知泉書館。
- 杉田武志 [2010] 「17 世紀イギリス東インド会社の会計帳簿の分析－売残商品の売価評価とその背景－」 『會計』 第 178 巻第 1 号。
- 高寺貞男 [1988] 『可能性の会計学』 三嶺書房。
- [1999] 『利益会計システムの進化』 昭和堂。
- [2008] 「市場の不完全さと市場価値会計の適用限界」 『大阪経大論集』 第 59 巻第 2 号。
- 玉木俊明 [2008] 『北方ヨーロッパの商業と経済 1550－1815 年』 知泉書館。
- 千葉準一 [1991] 『英国近代会計制度－その展開過程の探求』 中央経済社。
- 徳賀芳弘 [2011] 『会計基準における混合会計モデルの検討』 IMES Discussion Paper No.2011-J-19, 日本銀行金融研究所。
- 中島道義 [2007] 『「時間」を哲学する 過去はどこへ行ったのか』 講談社現代新書, 第 22 刷。
- 野矢茂樹 [1996] 『哲学の謎』 講談社現代新書。
- 羽田 正 [2010] 『冒険商人シャルダン』 講談社学術文庫。
- 藤井秀樹 [2011] 「FASB/IASB 改定概念フレームワークと資産負債アプローチ」 『国民経済雑誌』 第 204 巻第 1 号。
- 松井 透 [1991] 『世界市場の形成』 岩波書店。
- 松本敏史 [2008] 「財務会計と管理会計の融合」 『會計』 第 173 巻第 5 号。
- 宮沢章二 [2010] 『行為の意味 青春前期のきみたちに』 ごま書房新社。
- 渡邊 泉 [1993] 『決算会計史論』 森山書店
- [2005] 『損益計算の進化』 森山書店。
- [2008] 『歴史から学ぶ会計』 同文館出版。
- [2010] 「取得原価主義会計と公正価値－市場原価による測定的位置づけ－」 『會計』 第 178 巻第 3 号。
- [2011] 「歴史から見る時価評価の位置づけ－取引価格会計としての取得原価と公正価値－」 『會計』 第 180 巻第 5 号。